

東北北部縄紋時代祭祀・儀礼遺構の

シンボリズムとその変遷

——「性的原理」と「擬似的住居」——

小 林 克

要旨 東北地方北部の縄紋時代前期には特徴的に岩偶を伴う大型堅穴建物や盛土が、独特な祭祀・儀礼遺構として成立する。より南の地域では石棒と石皿ないし埋甕、石棒と土偶といった男女の「性的原理」をあらわす集落や墓地在中期に顕在化し、北部の円筒土器文化が大きく変容する中期後葉から末、そして後期初頭から前葉にかけては、「擬似的住居」と呼ぶべき、一定の社会単位の死者送りの場が登場する。これと関連しかつ「大型不整形土坑」への関わりをもちつつ、後期の大型の環状列石が成立し、基本的に環状列石のない太平洋側でも、石囲炉に「性的原理」が示された特異な堅穴建物のある集落が現れる。晩期にも石棒・土偶一対の儀礼遺構、そして住居を模倣した環状配石が同一の墓域に組み込まれて存在する遺跡がある。様々なシンボルが継起する当該地域の祭祀・儀礼遺構の変遷は、集団の結ばれ方の変化が「性的原理」と「擬似的住居」を通して墓制や祖霊祭祀に反映したものと考えられる。

I はじめに

東北地方は縄紋時代前期に北海道南部の渡島半島とともに、円筒土器で示される地域圏と南の大木式土器で示される地域圏とに分立する。以前、筆者はこの東北地方の縄紋時代の歴史を特に前者の地域に焦点をあて、資源開拓、生産様式の確立、集団間関係の構築、居住形態の確立と転換、生産様式の転換と素描したことがある（小林 1997）。縄紋社会が「定住社会」であることを前提とし、そこへの道程と後の変化をいわば生態系に対する社会の技術適応史ととらえての論であり、部分の修正はあっても枠組みの概略は今なお変更が必要と思わない。論では沿岸・内陸の集落遺跡の分布変化が示す資源利用の変遷、大型住居と食料貯蔵型社会の成立、労働の難易差がもたらす資源価値の傾斜、遠隔地交易による威信経済とネットワークの発達など、資源獲得とその利用を底にした経済史的側面を重視した。

この地域の縄紋時代も「定住社会」成立当初からこうした経済史的側面と密接に絡みながら、しかし、そのみでは律し切れない特有な精神文化の歴史を備え、前稿でもその叙述を欠くことはできなかった。前期の大型儀器共同保有から後晩期墓坑副葬品が示す儀器分有社会への遷移、後期以降一面で「遊動性」を帯びた社会が生み出した動物形製品やいわゆる狩猟文土器、そして大型の記念物である環状列石など、全体の描写には社会構成にかかわる精神文化への言及が不可欠であったからである⁽¹⁾。そして、その言及には一部に民俗（族）誌とその評価を援用しながら

の解釈を加えた。過去の精神文化に対しそれらによって明らかにされる意味論が、歴史叙述全体として必要かつ有意と考えたからである⁽²⁾。

本稿では改めてこの精神文化を、特に遺構に現れる象徴的側面に焦点をあてて叙述する。ただし、それは民俗（族）誌のデータに依拠しない。したがって遺構が示す具体痕跡（＝シンボル）の子細な意味、すなわちタイトルにも掲げた祭祀・儀礼がなにかを直接に考えるのではなく、想定されるそれが時間的な変化に応じどのようにシンボルを発現させ変容させたか、その追跡による地域社会の特性についての解釈となる。しかし、以前の解釈にあわせて述べることに変わりはない⁽³⁾。

東北地方で草創期～早期の祭祀・儀礼遺構の可能性が考えられる遺跡は、きわめて限られる。例えば長谷部言人に託され東京大学に収まった秋田県北秋田市綴子大畑の7点の筥状石器は、いわゆるデポの遺跡と考えられるが、その実態はよくわからない。また、同じく秋田県横手市山内岩瀬遺跡でも数点の両面調整石器が埋納された状態で見ついている。しかし石器の製作遺跡であり、やはり埋納された状態が祭祀・儀礼にかかわるかは不明である。

集落の特定箇所に土器や石器の「捨て場」が設けられるようになるのは、早期段階である。斉藤慶吏氏によれば青森県内では貝殻・沈線文系土器の段階でそうした「捨て場」が見つかるようになり、次の縄紋条痕系土器の段階では貝塚の登場を見るようになって、八戸市赤御堂貝塚や長七谷地貝塚、日ヶ久保貝塚など6遺跡が数えられるという（斉藤 2011）。捨て場や貝塚を単なる生活残滓の廃棄場として考える分には、祭祀・儀礼の側面は見えてこない。しかし縄紋条痕系土器の段階には土偶が伴い装身具が出土し、そして土坑墓も出現することがあわせて指摘される。このような遺物や遺構の確認が捨て場や貝塚であることを考えると、その空間では遺体が安置され何かしらの儀礼が執り行われたことが推測される。しかし、幾ばくとも遺構自体の属性および出土する特殊な遺物との相関から推論が可能となるのは、やはり前期以降である。本稿で扱う遺跡を図1に示す。

Ⅱ 東北地方北部祭祀・儀礼遺構の変遷

1 前期～中期

1) 前期の遺構

冒頭に述べたとおり前期には北部で円筒土器文化、南部で大木式土器文化が成立する。前者では、たとえば生産用具であれば半円状扁平打製石器など特徴的な遺物が伴うが、祭祀・儀礼にかかわっても独特な製品がある。灰白色の凝灰岩を用いて製作されるいわゆる「肩パッド型」の岩偶であり、20cmを超える大型から10cm以下の小型品まで大きさには変化がある。そして、本州では日本海側に偏って分布すること、渡島半島から津軽地方では大小の岩偶が1遺跡から複数出土するのに対し、秋田県北部を流れる米代川流域では1遺跡からの出土は単独であることが早く

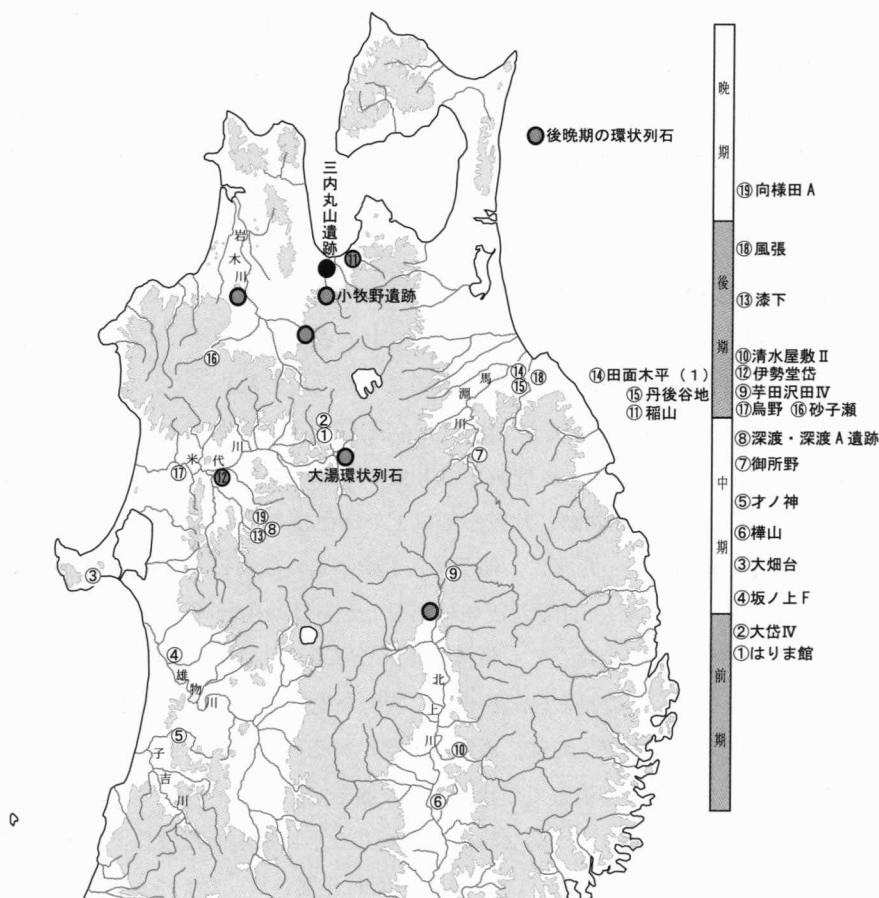


図1 地理的位置と編年位置

に指摘されている（稲野 1993・1997）。

米代川流域でこの種の岩偶が出土するのは、上流側の鹿角市、小坂町、大館市および支流阿仁川流域の北秋田市に所在する遺跡である。鹿角市三ヶ田館跡（秋田県教委 2007）、小坂町内岱遺跡（江坂 1963）、はりま館遺跡（秋田県教委 1990）、大岱Ⅳ遺跡（秋田県教委 1984）、大館市狼穴遺跡（稲野 1997）、池内遺跡（秋田県教委 1999）、上ノ山Ⅱ遺跡（秋田県教委 1988）、萩ノ台Ⅱ遺跡（秋田県教委 1993）、茂屋下岱遺跡（奥山 1971）、北秋田市阿仁川流域旧森吉町の長野岱Ⅰ遺跡（高橋 1993）、二重鳥Ⅰ遺跡（北秋田市 2006）であり、発掘調査で出土したものは、集落にあって特徴的な竪穴建物跡の近くや、斜面の盛土（捨て場）から見つかった。

はりま館遺跡 秋田県北部十和田湖に近い小坂町に所在する。十和田湖の南西から流れ下る小坂川右岸、標高200m前後の段丘上に遺跡がある。遺跡全体からは前期半ばの円筒下層a式土器も出土しているが、岩偶が出土したのは前期後半円筒下層c式ないしd式に中心をもつ集落跡の1棟の竪穴建物跡近辺である。SI152は長径12.6×短径8.4mの大型竪穴建物跡であり、その南辺

やや東寄りの外側2.3mの礫群中から、胴中央で2つに割れた岩偶が約30cmの距離をおいて見つかった。全長12.1cm、肩部の最大幅が6.3cmの中型品である。周辺には合わせて21棟の竪穴建物跡があり、床面の掘削が基盤の段丘礫層に達し掘り上げられた礫が周囲に散在する状況であった。SI152も周囲を幅4～5mの環状の礫群によって取り巻かれている（図2右上）。報告では本建物跡の床面を段丘礫層まで深く掘り込み、結果排出された礫が周囲を取り巻いた状況と説明されている。

ただし、ほかでも段丘礫層まで床面を掘り込んだ建物跡はあるが、SI152のようにほぼ全周が礫群によって囲まれた例はない。報告書付図2に示された礫群の広がり、建物跡の間や建物跡群から離れた地形の段に沿って南北に帯状に伸びることが見てとれる。これらは竪穴を掘削して排出した礫を集めたものと考えられるが、おそらくSI152も竪穴掘削で排出した礫のみならず、礫群中から出土した土器・石器とともに他所からも集められ周囲に環状の盛土（礫）を備えるに至ったのだろう。SI152は他の建物跡に比較し倍以上の床面積をもつ大型建物跡であるが、そうした特異な建物がその機能を失った後に、他所からも礫が集められその過程で岩偶を用いた儀礼がなされた、と見られる。また、SI152北西側の床面上からは緑色凝灰岩製の垂飾品が出土している。数多く出土するような品ではなく、集落のなかで佩用してしかるべき特別な地位の構成員がこのSI152にかかわっていたことを想定させる。特別な地位を思わせる装身具が出土し抜きん出た規模をもつ建物はその役割を終えた後、周囲に礫群が集められ、かつその場で集落唯一の岩偶を用いた儀礼が行われていた、本遺跡での状況をこう捉えておく。

大岱Ⅳ遺跡 はりま館遺跡から北へ約2km離れた同じく小坂川右岸の段丘上にある。標高230mの西に面した台地縁とそれから10mほど下りる斜面が発掘され、たくさんの円筒下層b式～d式土器やそれに伴う石器類が投棄され見つかった。調査された台地縁には同時期の竪穴建物跡6棟と土坑5基があったが、斜面の遺物類はこれら台地上面の生活域から投げ捨てられたように見えた。遺物は斜面の土層断面第5層以下に多く包含されていたが、図に示した地山の再堆積層である7層にも少量が含まれていた。全長15.1cm、肩部幅8.6cmの岩偶はこれらの遺物が投棄され始める斜面上部の凹みとなる地点から出土した（図2下）。

米代川上流域での円筒土器文化の遺跡、ことに下層式に属する土器を多く出土する遺跡では、大岱Ⅳ遺跡のように斜面から多量の土器や石器類が出土する遺跡が目立つ。大館市の池内遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、狼穴Ⅱ遺跡（秋田県教委 2010）や鹿角市三ヶ田館跡がそれぞれ、台地上面に竪穴建物跡や付随する遺構群があって、斜面には夥しい量の土器を中心とする遺物が投棄された状態で残される。あたかも台地上の生活域に対応した捨て場のように想定されるが、大岱Ⅳ遺跡を含め遺物を包含する斜面に地山再堆積層が厚く盛られる例も多い。池内遺跡では台地上面の竪穴建物跡等が円筒下層c式およびd式であるのに対し、斜面下部に堆積していたのが円筒下層b式を中心とした土器であり、それを地山由来の黄褐色土が厚く覆っていた。これから、台地上面に本来あった円筒下層b式の遺構面が大きく削り取られ、その際の削土が下層b式土器の堆積の上

その排土がすでに斜面に投棄されていた茂屋下岱式および円筒下層a式土器の堆積を覆い、その後の削平面に平安時代の竪穴建物跡が作られたためである。斜面から多量の遺物が出土するこれら前期の遺跡は、多かれ少なかれ台地上を大きく削平する整地とその削土の斜面への盛り立てとを伴い、土器などが廃棄されたことのみが示されている訳ではない。岩偶はこうした地業、すなわち空間造成に伴ったものと考えられる⁽⁴⁾。

前期の岩偶出土が示す祭祀性 はりま館遺跡では大型竪穴建物跡の近傍から、大岱Ⅳ遺跡では斜面の盛土から、円筒下層式期に特徴的な岩偶が出土した。大岱Ⅳ遺跡例は米代川上流域の他の遺跡群同様の空間造成を伴う地点の出土であり、はりま館遺跡では礫群を竪穴周囲に集めるという、やはり一定の地業を伴う地点での出土である。そして竪穴内には集落のなかで特別な地位の構成員を思わせる垂飾品が残されていた。このような状況は盛土に際し岩偶が供えられる何らかの儀礼が行われたことを推測させる。垂飾の出土は葬送を想定することもできる。しかし、大きな地業の後に行われたその状況は個別的な儀礼というよりも、集落の構成員全体がかかわった行為だった可能性が高い。前期の円筒土器文化の遺跡では大館市上ノ山Ⅰ遺跡の大小2本の「鋒形石器」の出土例など、集団全体で保有した儀器の存在が知られるが（小林 1997）、仮に葬送にかかわることとしても個別的ではなく、集団の構成員が全体であたる、公共性の高い祖霊祭祀を考えることが適当と考える。

2) 中期の遺構

中期に展開する円筒土器文化の遺跡でも、たとえば青森市三内丸山遺跡や外ヶ浜町中の平遺跡のように規模の大きな盛土が造られる遺跡がある。このような遺跡は前期の岩偶のような特有の祭祀遺物が伴うわけでない。しかし、盛土という共通の遺構をもって前期来の祭祀性が脈絡を保ったと見られる。そして中期になっては、円筒土器文化の中心からやや離れた日本海沿岸において、独特な祭祀遺物およびそれを用いた遺構を認めることができる。北陸地方とも関連するであろう、それを見る。

大畑台遺跡 日本海に突き出した男鹿半島南岸、男鹿市船川に所在する大畑台遺跡は、中期初頭から後葉大木9式までの竪穴建物跡51棟が見つかった集落跡である（日本鉱業株式会社 1979）。竪穴建物跡群はその周囲に3箇所見つかった盛土（捨て場）とともに東西100m、南北70mの範囲に広がり、西側に40棟ほどが、また対応する東側にも10棟ほどが中央広場を囲んで配置する。中央広場には2.5×1.7mの範囲にまばらながら石を集めた集石遺構があるが、集石ないし配石を中心に置いた広場空間の外側に竪穴建物跡群が広がる全体構成は、東北地方、日本海側の放射状配列の集落跡として著名な秋田県大仙市協和上ノ山Ⅱ遺跡（前期）と同じである。前期以来の集落構造を踏襲した遺跡である。

本遺跡では祭祀遺物として土偶および石刀、石棒類が出土している（図3）。円形に膨らむ腰部の土偶①は南側盛土（捨て場A）から、石刀②は西端の竪穴建物跡38号住から、同じく石刀③

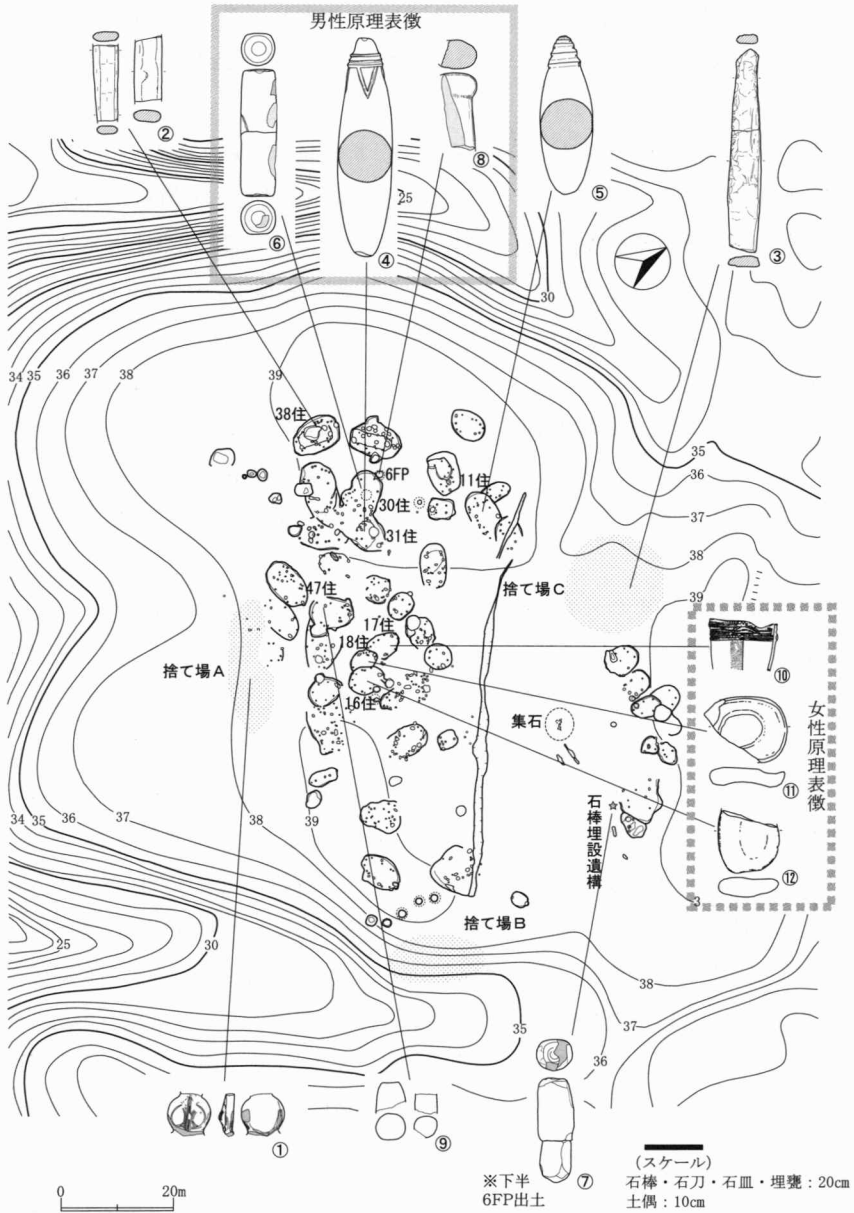


図3 大畑台遺跡 石棒・石刀・土偶・埋甕・石皿出土位置

は北側の盛土（捨て場C）から出土した。石棒は6箇所から出土しているが、胴張りで一端に鐳をもつ北陸型の大型有頭鐳付石棒④は西側の31住から、同形の石棒⑤はそこから北東へ20mほど離れた11住附近から採集された。また、円柱形で両端面に同心円文をもつ端部彫刻石棒（阿部2010）⑥は31住と重なる30住から被熱し表面が剥落した状態で、これと同形の⑦は同じく被熱したその上半部が東側建物群に接して設けられた小ピット内の石棒埋設遺構から、周囲を打ち欠

いた下半部が31住近くの6号フラスコ状ピット（以下、6FPと表記）から出土し接合した。そして男根を模した大型有頭石棒⑧は同じく6FPから出土した。ほかに47住からは端部に凹面をもつ石棒片とさらに別個体の石棒片が出土した。

三内丸山遺跡を中心に中期の石刀、石棒類を集め分析を試みた茅野嘉雄氏によれば、端部彫刻石棒は中期前葉から後葉まで円筒土器、大木式土器の地域をまたぐ北海道から青森・岩手・秋田・山形に分布し、北陸型の大型有頭鋳付石棒は中期後葉に日本海側を北上して秋田まで分布を広げる、とされる（茅野 2013）。大畑台遺跡はこうした異なる地域の複数の石棒類が出土した遺跡であるが、茅野氏があわせて指摘するように前者に火を受ける例が多いことは、本遺跡の端部彫刻石棒⑥⑦にも現れている。北陸地方との繋がりをもつ大型有頭鋳付石棒④⑤が火を受けていないこととは対照的であり、最終的に火に晒しかつ打ち欠いて破壊することがこの地域での本来的なあり方だったのかも知れない。そして破壊しながらも建物跡近傍に埋設用のピットを設け一部を埋設した⑦からは、やはり立て置くことが儀礼の最終場面でのあり方だったことがうかがえる⁽⁵⁾。

ところで、大畑台遺跡の集落分析を行った富樫泰時氏は西側の建物跡群のうち、その順で重複する17住、18住、16住の3棟が床の2段構造、U字形の石囲炉で共通し、円筒上層c式から大木8b式の間に「同族が系統的に建て替えた住居」ではないかと指摘した（富樫 2007）。これには18住と16住で対応する位置に、石皿⑪と⑫があることも根拠に加えられている。そして、17住ではまさに同じ場所に埋甕⑩が設置されていることも見逃すことはできない。祭祀のシンボルとして石皿と埋甕のもつ意味は相同であり、17住の円筒上層c式期の埋甕の位置に18住と16住では石皿が置かれている、と見るべきである。建物内の同じ位置に残された円筒式と大木式で異なる物象が、同じ象徴的意味を表していると見るべきであろう。これら3棟の建物跡を「同族が系統的に建て替えた」とする蓋然性は高いだろうが、さらに重要なのは、これら石皿・埋甕を出土した建物跡と対になって、その北西側に前述の男根形の大型有頭石棒⑧、端部彫刻石棒⑥、大型有頭鋳付石棒④が出土した、6FP（フラスコ状ピット）、30住、31住が位置することである。共存した土器や重複関係からはこの順に新しく、その時期幅は17住、18住、16住の示す円筒上層c式=大木7b式期から大木8b式期に収まる。すなわち、これら石棒を備えたフラスコ状ピットと2棟の建物跡は、その南東側に位置して石皿・埋甕を伴った3棟の建て替えと即応し変遷した可能性が高い。その場合には石棒祭祀を担った社会単位の系譜と石皿・埋甕祭祀を担った社会単位の系譜とが、集落内に併存し遷移したことになる。象徴的な当てはめが許されるのであれば、前者は男性原理を後者は女性原理を表徴する単位であり、この「性的原理」が集落の基本構造に現れていることは、中期以後の祭祀・儀礼を考える上で重要である⁽⁶⁾。

坂ノ上F遺跡 大畑台遺跡では北陸型の石棒とともに、新保式、長者ヶ平I式など中期北陸系の土器が多く出土したが、秋田市南郊の御所野台地の遺跡群でもこれら北陸系の土器は比較的多く出土している。その遺跡の一つ坂ノ上F遺跡は、中期前葉竪穴建物跡6棟と中期末竪穴建物跡

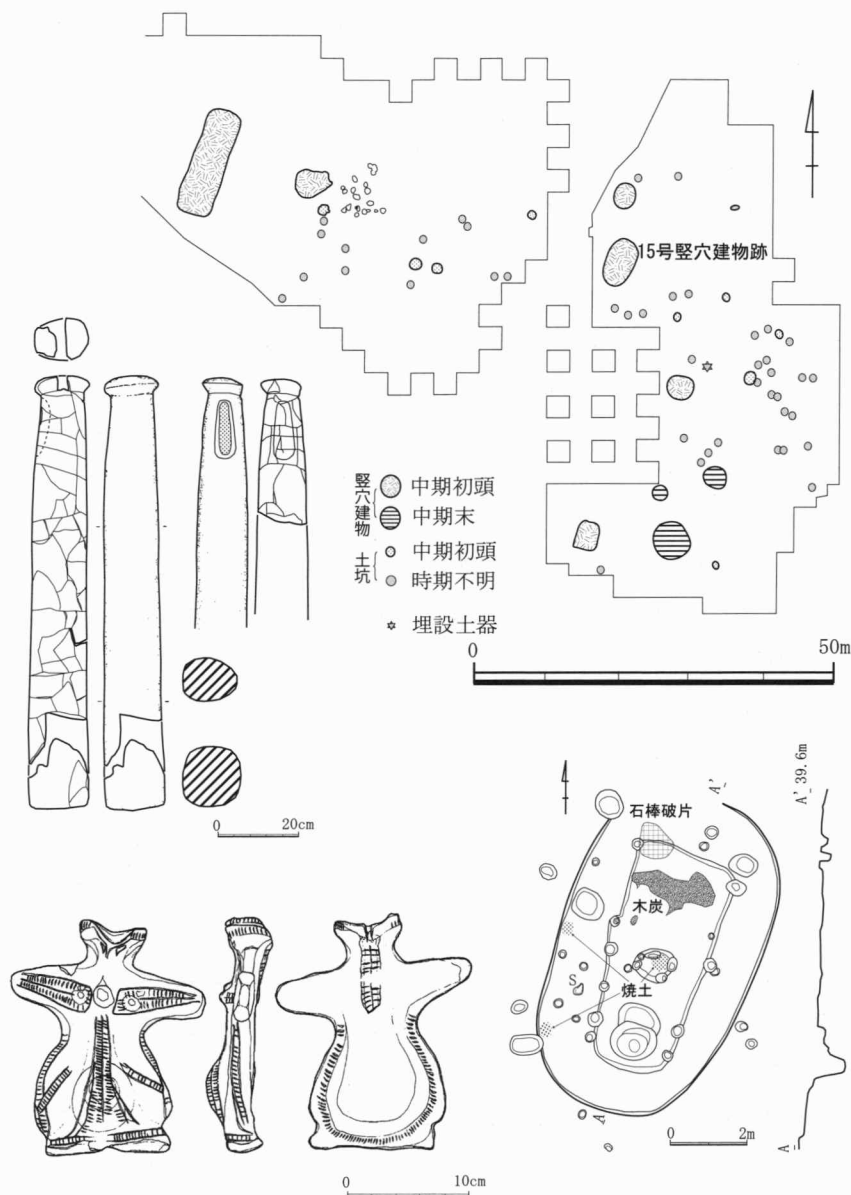


図4 坂ノ上F遺跡 15号竪穴建物跡と出土した石棒・土偶

6棟などが見つかった遺跡であるが、うち、15号建物跡からは特徴的な石棒祭祀の痕跡が確認されている（図4 / 秋田市教委 1985）。

15号建物跡は長径8.5m、短径5.2mの小判形を呈する建物跡であるが、2段構造の床面の特徴からその時期は中期前葉と判断される。短径がやや狭くなる南側床の下段には、この時期の建物跡に特徴的にみられる「特殊ビット」があり、その反対の北西隅下段から上段の床にかけて細かく被熱破碎した石棒が見つかった。石棒南側の床面には木炭の広がりがあり、上下段の床の境に

あった柱穴にも炭化材が残されていた。石棒は推定長108cm、最大径15cmの大型品に復元され、一端に鐙状に張り出した頭部が設けられている。胴部は一面に平坦面が設けられ、特徴的にその面の頭部に近い側に長さ14cm、幅5.5～6.5cm、深さ2.5cmの抉り込みを備えている。大畑台遺跡④の大型有頭鐙付石棒の頭部鐙下に施された三角形の意匠と同じ意味の装飾と見られ、全体の形式は異なるが部分で共通したデザインが先行して現れた例である。

この石棒が焼けた破砕状態で出土したことは、大畑台遺跡での端部彫刻石棒⑥⑦と共通する。しかし、その程度は大畑台遺跡例をはるかに超えている。伴った木炭の広がりとは併せ、最後に原形を留めないほどに破壊し尽くす儀礼があったことをものがたる。さらに注意されるのは、報告書に地点の図示はないものの東壁に接した位置で完形の土偶が出土していたことである（図4 下/菅原 2002）。逆三角形の顔面に極端な吊り目が描かれ、胸部中央に凹みが施され、頭頂、両腕、正面正中線、背中、腰から脚にかかる両面は併行沈線間を短沈線列で充填した紋様で飾られる。やはり北陸地方に由来する特徴を備えた、大木7b式期の土偶である（金子 2014）。

この石棒と土偶とが対になって同じ建物跡から見つかったことは、大畑台遺跡の集落内で見られた建物群ごとの男女両性の原理が、1棟の竪穴建物跡のなかに組み合っていることを示して重要である。15号建物跡内の石棒と土偶のそれぞれが、執行された儀礼の場面で具体的に何を表現したかは詳らかでないが、円筒土器と大木式土器、そして北陸系土器が示すそれぞれの地域文化の系譜が複雑に絡んだ結果に発現したことかも知れない。

さて、坂ノ上F遺跡と同じ御所野台地の坂ノ上遺跡（B遺跡）では、一端に鐙をめぐらした直線的なプロポーションの石棒が、1.1～1.5mの距離を置いて配置する径24～50cm、深さ20～36cmの4つの柱穴に囲まれ、西にやや傾きつつ立った状態で出土した（図5）。長さ58cm、最大径10.5cmで鐙のある側の端面はやや凹み、鐙の下の一側面に平坦面があるようである。報告書では出土した場所を4つの柱穴で囲まれた「石棒に対する儀礼儀式等の行為のためのスペース」と推測する。共伴した土器の記載がなく時期の詳細が不明だが、形状から中期後半段階であろうか？竪穴建物跡ではない特別の施設があったことは注意しておきたい。

才の神遺跡 中期後半の石棒が立った状態で出土したのは、大畑台や坂ノ上遺跡よりも南に位置する、由利本荘市才の神遺跡でも認められている（図6/秋田県教委 1980）。端部の鐙がわずかな段に変わっているものの、胴張りの北陸系の大型有頭鐙付石棒である。長さは73.5cmで一側面に縦に細長く擦った跡が認められる。出土時には斜め35度に傾いた状態であったが、土圧により傾いた結果と推測されている。しかし、この点は坂ノ上遺跡の石棒がやはり傾いていたことを考慮すると当初から斜めに設置された疑いも拭えない。また、周辺には大木8b式期の竪穴建物跡があり、この立った石棒はそれら建物に囲まれていたのであるが、坂ノ上遺跡のような特別な施設のなかという訳ではなく、戸外に立てられていたようである。

才の神遺跡では、この石棒および周囲の竪穴建物跡群の広がる場所から西に離れた地点で3基の土坑墓が見つかった。長径1.3～1.65m、短径0.8～1mの小判形で、30～60cmの深さが

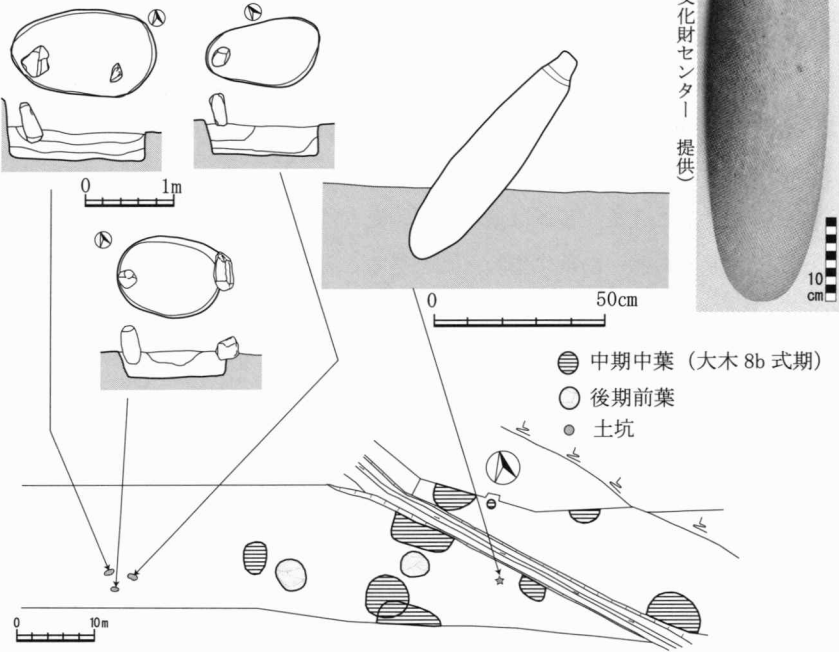
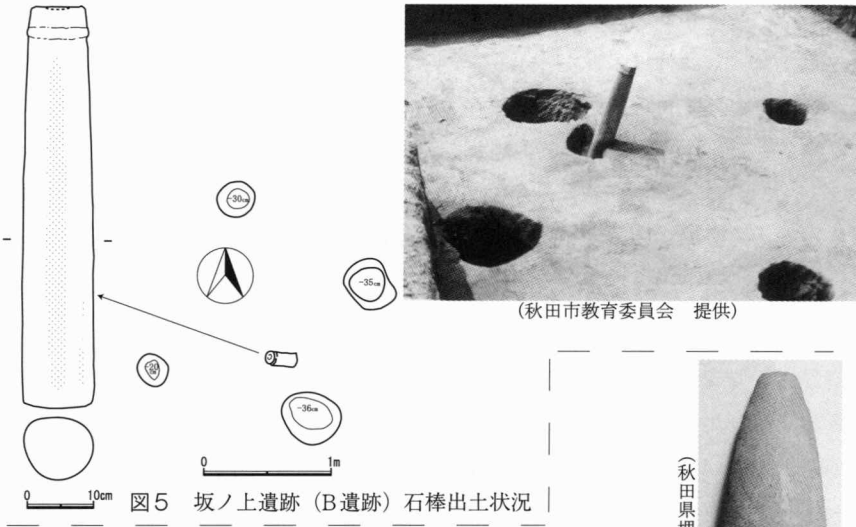


図6 オの神遺跡 石棒出土状況と立石土坑墓

ある。特徴的なのは長軸の一端ないし両端に大きな石を立て置いていることで、本来はこの石が隠れるほど深く掘られていたのだらうと推測されている。筆者はかつて後期の東北北部から北海道南部の環状列石の成立に関する遺構ではないかとして、北海道仁木町モンガクB遺跡の環状配石墓をとりあげたなか、その類例である本遺跡の土坑墓にもふれた(小林 2007)。先に大畑台遺跡の男性原理の表徴に北陸型の大型有頭鏢付石棒を数えたが、これが墓から独立してあること

は注意して良い。モンガクB遺跡の上面に礫を立て置いた環状配石墓でも男性原理をそのまま示すような、石棒ないし石柱は墓域から見つかっていない。「性的原理」は墓と離れて独立した祭祀として営まれたなかに機能したのかも知れないが、奥羽山脈を越した北上川流域では、ほぼ同じか以降に男女対の「性的原理」が墓に現れた遺跡がある。

樺山遺跡 岩手県北上市に所在する樺山遺跡は、北上川左岸に発達した標高80～100mの河岸段丘上に位置する。昭和25年に発見された後、翌26年から平成5年までの発掘調査で、おもに段丘下段では中期後葉までの墓である配石遺構群、上段では甕棺を加えた墓域そして居住域が確認されている（江坂ほか1968）。

才の神遺跡の土坑墓との関連が考えられる配石遺構は、下段に37基確認されている（図7）。帰属時期はわずかな伴土器から中期後半とみられたが、その後に行われた調査でも2基の配石遺構の下から大木8a式土器を出土した竪穴建物跡が発見され、大木8b式ないし大木9式期以降と考えられるようになった⁽⁷⁾。遺構は単に川原石を集めた例と、埋葬主体の土坑墓に特徴的な組石を施した例とがある。後者には13号配石のように土坑の中心に大きな柱状の石を立てるものと、11号配石、12号配石のように石皿を土坑の縁に立て、その前面に川原石を敷き詰めるものがある。柱状の中心立石は8基の配石遺構で認められるが、石皿を立てるのは11号、12号の2例のみで、他に石皿が出土した10号は配石を構成する他の石に伏せた状態でその欠片が出土したもので、下部の土坑も確認されていない。

先に大畑台遺跡で見たように、石皿は墓坑に働いた女性原理と見ることができようし、中心立石は石棒同様に男性原理の働いた墓に備わったと見る事ができよう。それが単純に被葬者の性別に結ばれないことは、石皿を使った配石遺構の少なさから明かである。むしろ、10号、11号、12号の石皿を用いた配石遺構が、限られた狭い範囲に位置し、それと対になるよう5号、6号、13号が同じ範囲にあることは、そこが墓域造営の中心であって、大畑台遺跡で見たような集落構成の「性的原理」の単位が、樺山遺跡の墓域では立石、石皿の違いとして現れたと考えるべきだろう⁽⁸⁾。

御所野遺跡 馬淵川上流右岸、標高190～206mの東西に延びた細長い段丘上にある遺跡である。台地の北縁近くに2つの配石遺構群があり、その外側を盛土遺構がめぐり、さらに竪穴建物群が盛土遺構の外側にめぐる構成をとる。2つの配石遺構群のうちその東側の群は東西およそ30m、南北およそ26mの範囲に8基の配石遺構がめぐる。一部地山近くまで掘り下げられた部分では配石の下に後述の「大型不整形土坑」のように、同じ地点で何度も繰り返し掘った土坑群があることが確認でき、その外側には6本柱の長方形掘立柱建物跡が軸線を揃えて並んでいる（図8／一戸町教委1993）。東側配石遺構群の1基FD52配石が樺山遺跡の石皿を立てた配石に似た構成をとる。径2×1mの範囲に楕円形に石を組み、その長軸の端に幅30cm、長さ40cmの立石が内湾した面を石の組まれた側、北西側に向けて立つ（図8上）。この向きは東側配石遺構群全体では外側を向く形になる。ほかの配石でも、たとえばFD54配石は1.3×0.7mの板状長方形の巨

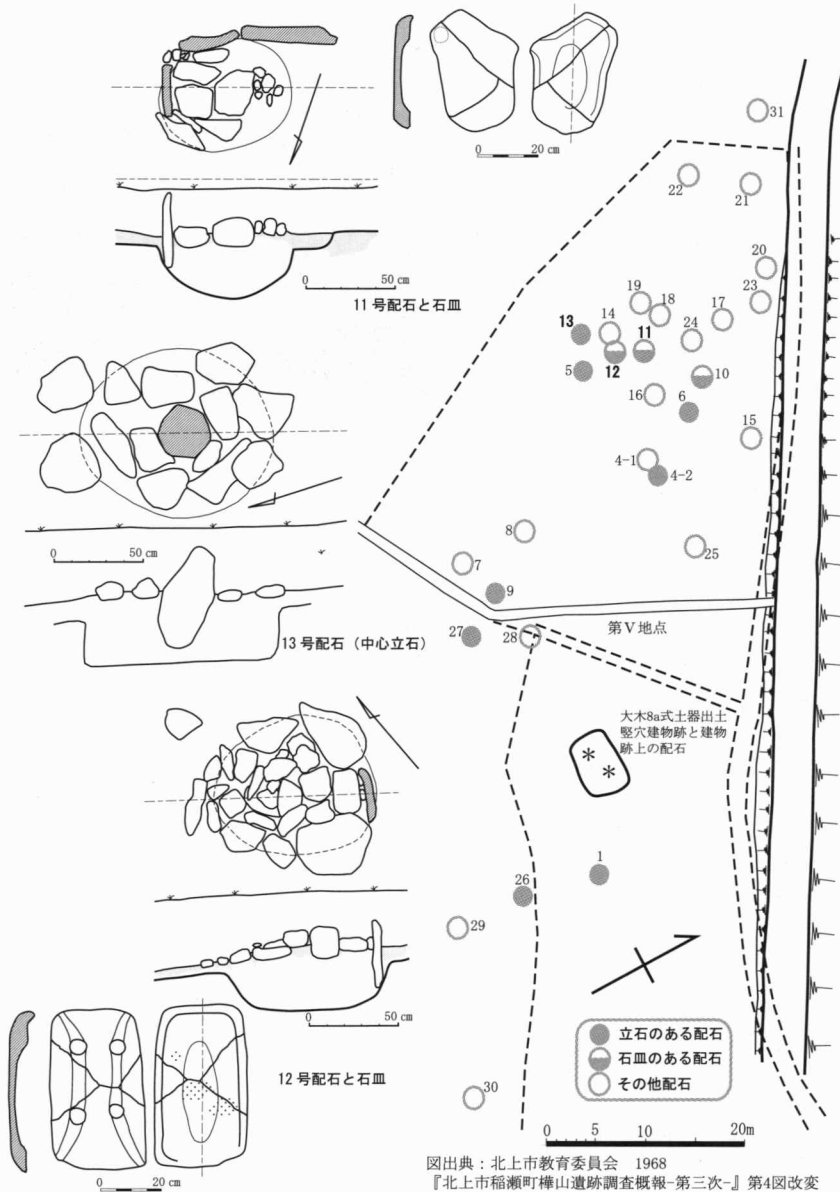


図7 樺山遺跡 石皿および立石のある配石

石が含まれ、それぞれ際だって大きな石が1～2個含まれている。

深渡遺跡・深渡A遺跡 東北地方の中期後葉は複式炉を備えた竪穴建物跡が顕著に認められるようになり、円筒土器が地域性を失うのと歩調を合わせて、その分布は北部まで広がる。この複式炉の竪穴建物跡に残された儀礼痕跡が、秋田県内陸北部で見つかっている。森吉山ダム建設で調査された深渡遺跡SI2001は、当初3.9×3.3mの楕円にめぐる小環状配石として確認された。

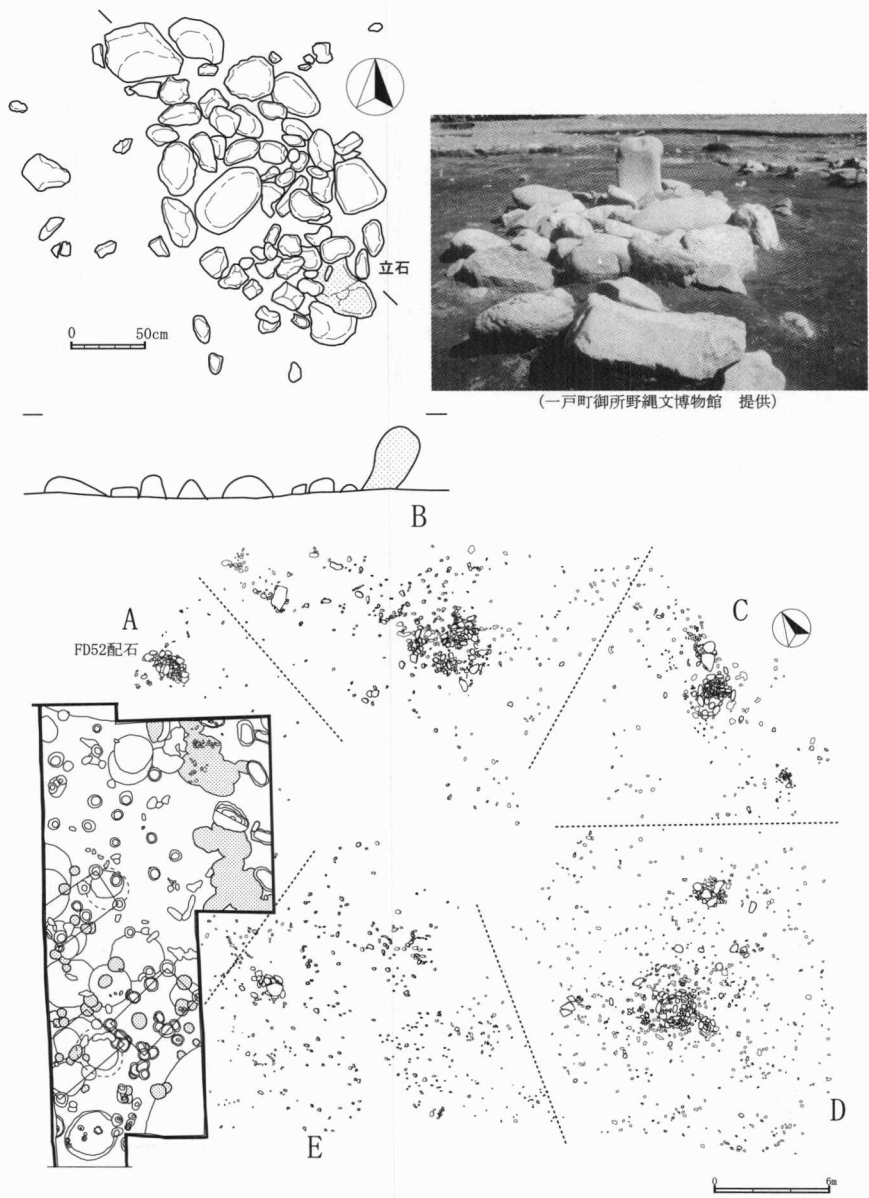


図8 御所野遺跡 東側配石遺構群とFD52配石

しかし、内部を断ち割って調査した結果、小環状配石は複式炉のある竖穴建物の壁に沿って石積み
みを施し、内部に土を充填して作られていたことが明らかになった（図9上/秋田県教委 2006）。
建物の機能が停止し上屋が失われた後も炉はそのまま残り、竖穴は開口状態で祭祀空間に転換し
た、その後に壁面に川原石が積まれ最後には内部に土が充填させられた、小環状配石に作り替え
られた過程はこのように辿ることができた。同じような複式炉を備えた竖穴建物跡は、上流側に
隣接する深渡A遺跡でも見つかっている（図9下/秋田県教委 2006）。一辺3 mほどの隅丸方形の

堅穴建物SI29が、北東壁中央に長さ1 m近い河床礫を露出させた状態で作られ、床面中央に直径1 mほどの焼土面が形成される（Ia段階）。その後北東壁中央の河床礫に対向し、複式炉とその北側に祭壇状石組が作られる（Ib段階）。複式炉および祭壇状石組は上屋を備えた堅穴内、すなわち屋内の施設と想定されるが、上屋が朽ちかけてから壁際に土を充填しその上に環状に石を並べ、北東壁の外側にも弧状に石を配列する。そして最後に残った上屋残材を焼却する廃絶儀礼が行われ、中央の凹みに土が充填される（凹み3・4層からは多量の木炭や地山土、大木10式新段階の土器が出土した）。この段階で遺構は完全に屋外の祭祀施設となる（II段階）。最終的な配石は抜き取り痕を残して大方の石が除かれていたが、堅穴構築の当初から建物の要の位置にあった大きな河床礫は復元された小環状配石のなかで、背後に弧状列石を備え中心的な位置を占めていた。

注意すべきは深渡遺跡SI2001が小環状配石に替えられた後に、壁に沿って二つの土坑SK2013とSK2014が作られていたことである。土坑は壁の石積みを壊して掘られ、壊された石積みの川原石は埋め戻しに際し再度埋め込まれていた。顕著な埋め戻しが認められたことからこの二つの土坑は墓と見なされ、元来SI2001に施された入念な環状配石への作り替えや廃絶儀礼など一連の過程に想定される儀礼もまた、死者それもある関係をもった社会単位に属する各々を送るためではなかったかと考えられた。

こうした推測を補強する事実には、SI2001南東143 mほどの地点、一段高い段丘面に見つかった後期前葉のSI95がある。3.3×3.0 mの不整な円形プランで、深さ15～25 cmの鍋底状の傾斜で立ち上がる堅穴である（図9右上/秋田県教委 1999）。北壁際からは高さ20 cmあまりの小型の深鉢が出土したほか、石鏃2点が床面から出土した。報告は「住居跡」として扱うが内部に炉はなく、6箇所見つかった柱穴も全て堅穴外周にある。おそらく、居住の機能を与えるのではなく後述する伊勢堂岱遺跡など、米代川流域の環状列石ないし関連する遺跡に顕著な「大型不整形土坑」に連なる遺構と見られる。すなわち、中期末のSI2001に想定される死者送りの機能が、形を変えて継承された遺構と見るのが適当である。

「擬似的住居」 深渡遺跡SI2001も深渡A遺跡SI29も径3 m前後と堅穴として小型である。おそらくその本来の機能が停止した後、祭祀を専らに執り行う「擬似的住居」に転換し、その機能が石積みを施工したことで強化され、後期の葬送の場に作られた環状列石と同じ意味をかつて考えた（小林 2011）。

中期末に行われたSI2001、SI29のような「擬似的住居」の小環状配石への転換と、後期になっての伊勢堂岱遺跡や大湯環状列石（鹿角市教委 2005）、高屋館跡（秋田県教委 1990）のような米代川水系の環状列石の登場とは相応の因果関係、共通した意味がある。「墓域」と「居住空間」の関係性を通して、米代川水系における環状列石登場前後の集落構造を分析した海藤元氏もまた、中期後葉の鹿角市天戸森遺跡の配石および配石土坑に着目するが、そのなかにはSI2001やSI29の小環状配石に類似した配石土坑（第10号配石土坑）が含まれる（海藤 2013）。中期末の配石ないし配石土坑は景観論の上でも、環状列石の成立にかかわっている。

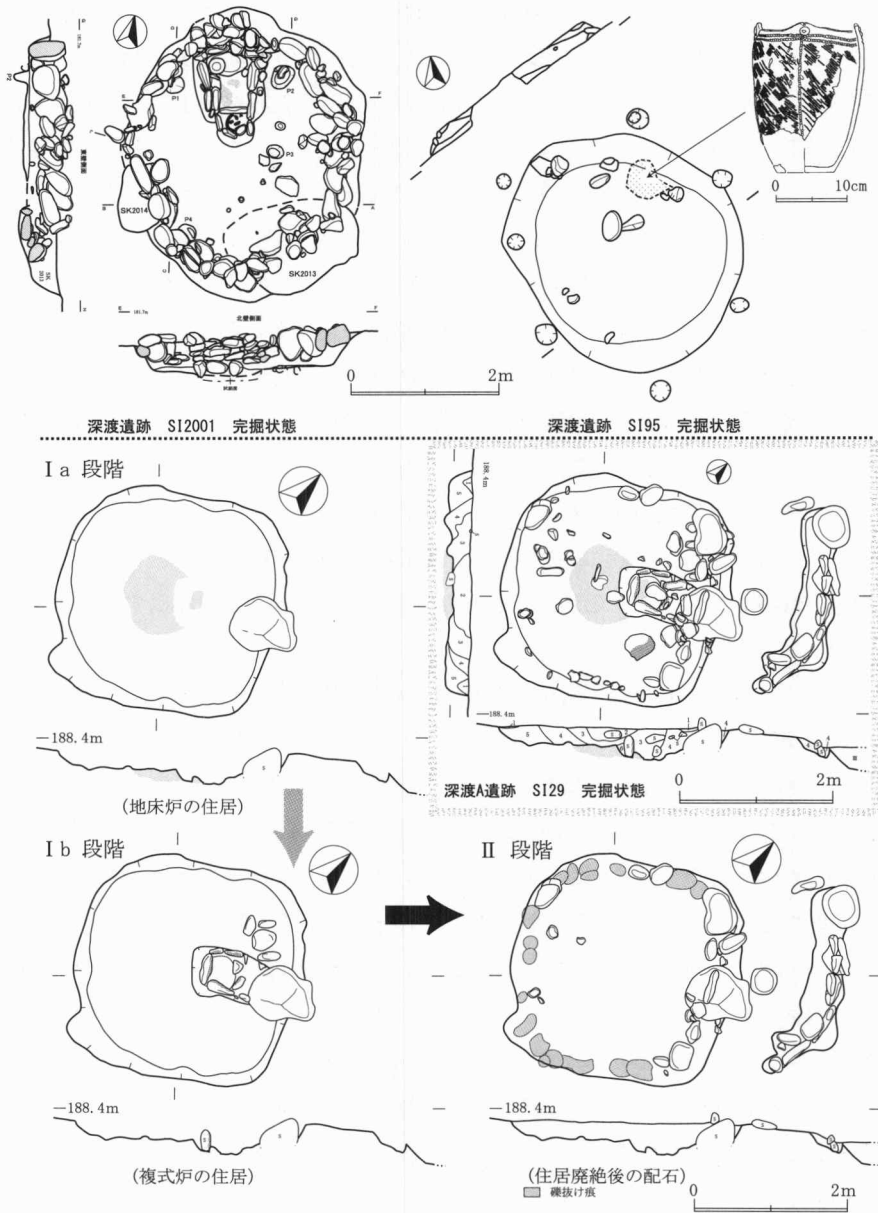


図9 深渡遺跡SI95・2001（上），深渡A遺跡SI29堅穴建物跡（下）完掘状態及び廃絶後までの変化

北上川流域の「擬似的住居」と環状配石 中期末に登場する「擬似的住居」は脊梁山脈を越した北上川流域でも中期末～後期前葉の例を見ることができる。盛岡市玉山区に所在する後期初頭～前葉の芋田沢田Ⅳ遺跡では掘立柱建物跡，堅穴建物跡からなる外縁周40mほどの環状配置の遺構群中に特異な住居状遺構RA13が確認されている（図10左）。径8.8mの円環をなす配石の南縁に2.5×3.5mの方形に組まれた配石がとりつく遺構で，関東地方に卓越する柄鏡形住居に類似し

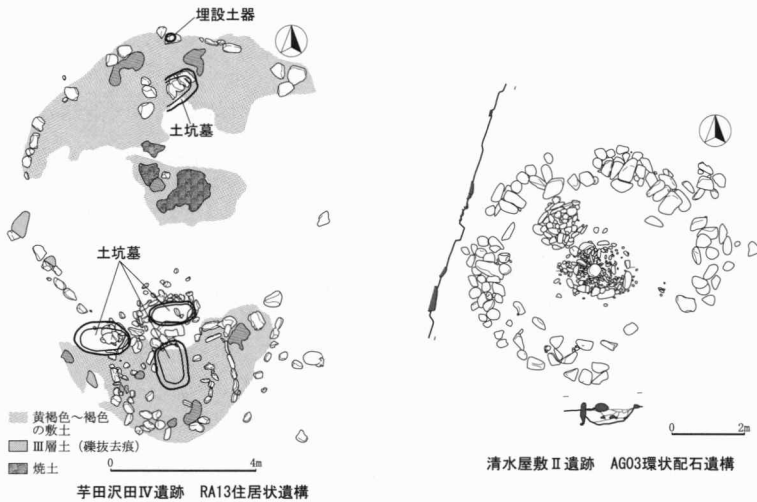


図10 北上川流域の「擬似的住居」と環状配石

た平面形をもつ⁽⁹⁾。特異であるのは形状だけではない。構築されたのは暗褐色～黒褐色の土壤上で、その上に黄褐色～褐色土を遺構輪郭に沿って敷均した上で配石したことが明らかにされている。そしてさらに遺構の南北主軸線上に北縁では埋設土器と墓と目される土坑が、南縁の方形組石内でも同じく土坑3基が設けられている。埋設土器と土坑は南縁の1基を除き敷土および配石以前に作られ、配石後の焚き火の結果焼土が残されたことが所見に述べられている。そして明確な柱穴を確認できないことから、露天の構造物であったことが推定されている（岩手県埋文 2013）。遺構の始まりや規模、そして細部の形状での差はあるものの、露天に作られた環状配石が本体としてあり、しかも土坑墓を備えた遺構であることは、深渡遺跡SI2001、深渡A遺跡SI29と共通した特徴とみられ、やはり同じ社会単位に属する死者を送る機能を備えた中期後葉の「擬似的住居」が後期に継続した例として注目される。

芋田沢田IV遺跡は北上川流域でも上流域にある遺跡であるが、樺山遺跡が位置する中流域でも「擬似的住居」との関連が認められる遺構がある。北上川支流の猿ヶ石川右岸に位置する清水屋敷II遺跡は位置関係から隣接する安俣6区IV遺跡およびV遺跡と一体の遺跡と見られ、大木10式、門前式及び宮戸Ib式土器を伴う中期末～後期前葉の環状列石遺構が、一部重なりながら計14箇所見つかっている（東和町教委 1998・2000・2002）。後期初頭の門前式期の列石には径4～6mほどに石をめぐらし、芋田沢田IV遺跡同様に列石一箇所に張り出しを設けたり、内部に石囲炉状に組んだ小型配石を備える例がある。その後前葉の宮戸Ib式期、清水屋敷II遺跡AG03環状配石遺構（図10右）は、径7.3×6.7mで石を巡らせた列石内中央に2×1.65mの円形配石を、その北東側にも1.12×1.5mの配石を置いた遺構である。中央の円形配石下には深さ50cmほどの土坑がある。芋田沢田IV遺跡住居状遺構RA13とほぼ同時期同形状の安俣6区IV・V遺跡環状列石遺構からの継続を考慮すると、本例も「擬似的住居」の変化形と見ることができる。

2 後期～晩期

1) 後期の遺構

中期の祭祀・儀礼遺構は、男女の「性的原理」に根ざす象徴的な遺構・遺物がどのように組み合い集落のなかに残されているか、また、集落を構成する本来居住の単位である竪穴建物が、葬送にかかわる死者儀礼を契機としどのように作り替えられるかで、見ることができた。前節にも述べたように後期には米代川流域など東北地方北部に大規模な環状列石が登場する。その登場の背景には中期末の深渡遺跡、深渡A遺跡の「擬似的住居」に見られるような象徴性があり、かつ、前期以来の規模の大きな削土の空間造成がある。

稲山遺跡 青森市の東郊、陸奥湾岸に近い標高30m前後の丘陵上の遺跡である。東に向かい伸びる尾根上に、前期の竪穴建物跡および土坑と重なり、後期初頭～前葉の環状列石および土坑群が作られている（図11/青森市教委 2004）。尾根頂部には径32mの列石を構成する配石ないし配石墓以外の遺構はなく、そこから南北に下りる斜面の際に列石を取り囲んで545基の土坑、2基の埋設土器がある。列石は尾根上の遺構分布が薄い空間北側に顕著で、南側では希薄である。遺構分布の薄い空間は等高線が開き、伊勢堂岱遺跡同様、列石を作る以前に削平と盛土がなされていたことを示すが（小林 2003）、本遺跡の場合円筒下層d式期を中心とする竪穴建物跡27棟や同期の土坑209基もこの空間には重ならず、すでに前期に一定の地業があったことがうかがえる。配石墓は列石中央にまとまって3基、そこから5mほど南東に離れた地点に1基、そして北側に

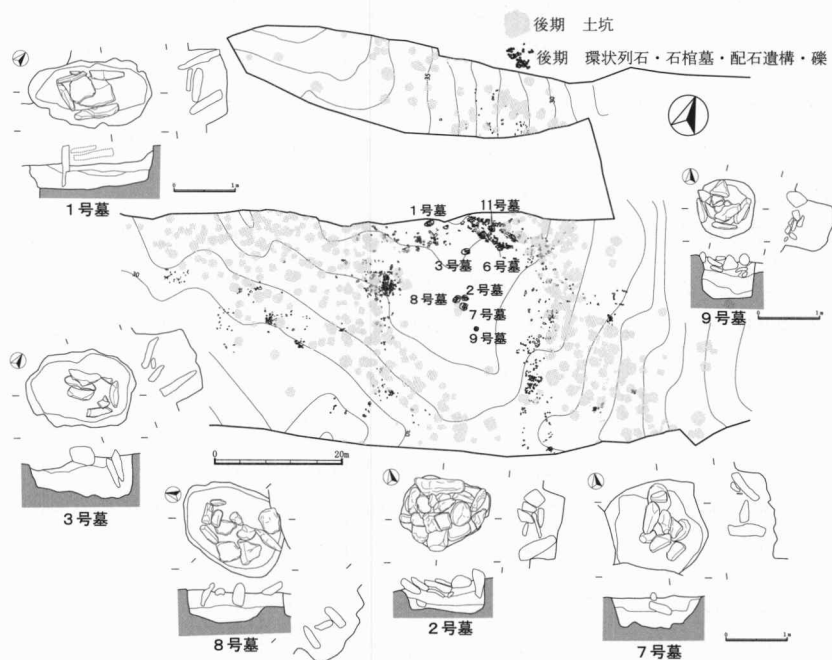


図11 稲山遺跡 環状列石と石棺墓・配石遺構

顕著に残る列石周辺に4基、計8基が確認されている。配石は複数の板状礫を立てて囲んだなかに同じく板状礫で水平に蓋をした例があり「石棺墓」と表記されるが、基本的に同じであろう。注意したいのはむしろ配石墓で墓地であることが明かな環状列石が、夥しい数の土坑群に囲まれるその構成全体である。土坑群には底径が口径よりも大きくなるフラスコ状断面の、すなわち植物質食料貯蔵が本来の目的である土坑が数多くある。遺跡に後期の建物跡はない。

前期以来の円筒土器文化が展開した地域では、後述する岩手県二戸市上里遺跡をはじめとし、青森県八戸市畑内遺跡、東北町古屋敷貝塚、秋田県旧三種町萱刈沢貝塚、北海道八雲町栄浜1遺跡などにフラスコ状土坑の墓坑への転用例があり、おそらく、その伝統は後期以降にまで下る。稲山遺跡の500基を越える土坑群には、墓への転用例があったと考えるのが自然であろう。

伊勢堂岱遺跡 米代川中流左岸段丘上にある伊勢堂岱遺跡は、標高43m前後の台地上に環状列石がある遺跡である。4つある列石のうち、最初に見つかった列石Aは長径30×短径27mの卵形の平面プランをもち、北側に張り出しの配石列を備えてその先が直線的に東西に延びる(図12/秋田県教委 1999)。列石Aの位置は台地北端に近いが、地形の等高線はその位置で大きく開いていた。青森県小牧野遺跡で顕著であるが、環状列石を作るにあたり地形を大きく削る地業が行われ、その影響が後世まで残ったためである。列石北側張り出しに接続する東西の配石列では等高線も直線として現れ、地業は列石の並びに即応している。石の配列は地業の直後に行われている。

環状列石が墓地として出発していることは、大湯環状列石を引き合いにだすまでもなく自明である。伊勢堂岱遺跡でも墓地を特徴づける土坑墓が86基報告されている。それらには上面に配石ある例を含め単独の一次葬墓と判断される土坑墓が40基あるが、ほかに33基の「大型不整形土坑」も墓に数え上げられている。長さが10m以上に達する例も含まれ、深さは1m前後で、特徴的に底面に凹凸が著しく、なかにはSKS282土坑のように掘り返しの痕跡が8箇所ほどの小土坑として縁辺に連なる例もある(秋田県教委 1999: 第72図)。埋土は土偶など祭祀的製品を含んだ多くの遺物とともに、何枚もの薄層がレンズ状に重なる状況であった。こうした埋土は、本来、単独の土坑墓や廃用したフラスコ状土坑を何度も掘り返して広げ、そのたびごとに少量の土で埋め戻すことを繰り返した結果の堆積とみられる。そして、なかには凹みの最終段階に焼土面が形成された例もあった。報告では環状列石を構築する直前、すなわち大規模地業が行われる直前に、この特異な土坑墓で繰り返し行われた祭祀の最後に火を焚く儀礼があったと推定している。

これら「大型不整形土坑」のもう一つの特異性に、そのほとんどに柱穴が伴うことがある。必ずしも規則的に配列する訳ではないが、図示したSKS31では周囲3箇所、2つないし3つずつの柱穴が、SKS404では周囲全体に21箇所の柱穴がある。これら柱穴から「大型不整形土坑」には上屋があったことが推定され、上屋の建っていた期間内部の掘り返し以外、外からの土の供給をほとんど受けることなく、埋まりきらずに凹地として続いたことが合理的に解釈される。SKS31の2つないし3つの組になった柱穴はほぼ同じ場所で柱の位置を換えた結果であり、SKS404では初め一番内側にある柱穴が土坑の広がりに応じて外側へと位置を換え、さらに土坑

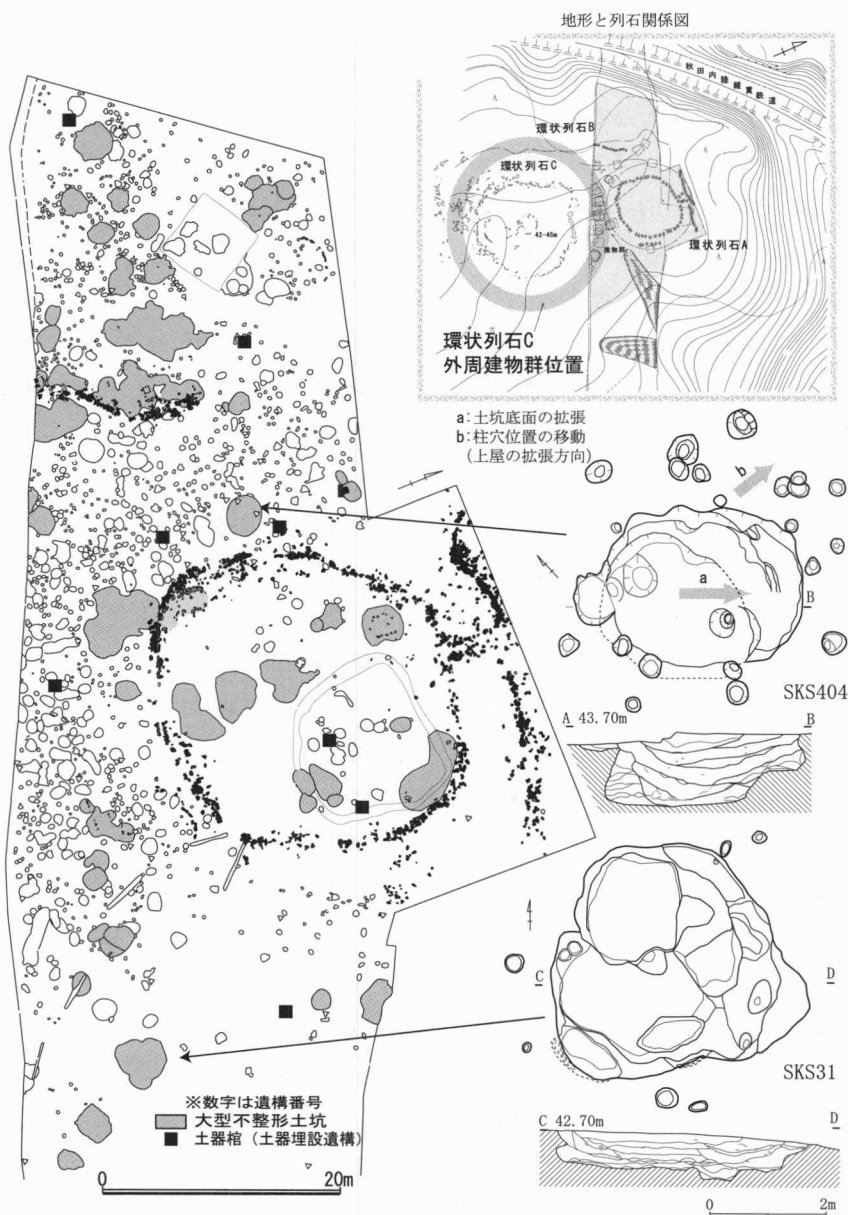


図12 伊勢堂岱遺跡と大型不整形土坑

底面が南東側に拡張するのにしたがって、東側柱穴列の一部がさらに東へ位置をずらしたことがうかがわれる。柱の建て替えを伴うほど土坑の墓としての使用は継続的・反復的であったといえる。米代川流域ではさらに下流側の能代市真壁地遺跡でも、こうした墓の機能を想定できる「大型不整形土坑」があり (小林 2007), 上流側の高屋館跡にも類似した土坑がある (秋田県教委 1990: 第38・39・40図)。

報告書が推定するように、単独の土坑墓や廃絶したフラスコ状土坑がこの「大型不整形土坑」の出発にあった可能性は高い。各種分類された土坑墓のなかには、周囲に柱穴群を備えた円形土坑墓が13基ある。これらも最終的に埋まるまで上屋があり、遺体が安置された「埋めない墓」として一定期間を確保したことが想定できる。フラスコ状土坑の墓への転用は、前期以来の円筒土器文化の特徴的な墓制であるが、たとえば円筒上層式期、岩手県上里遺跡竪穴建物跡内フラスコ状土坑の7体合葬例が示すように、直ちに埋め戻さずに開口した状態にあることが墓としての大きな特徴である。このような中期以前からある「埋めない墓」の伝統のなかに、「大型不整形土坑」も位置づけられるだろう¹⁰⁰。

ここで、当然に考えられるのは、縄紋時代中期後半に関東地方を中心に展開する「廃屋墓」（高橋 2007）とのかかわりである。「廃屋墓」は関東地方に特徴的な墓制であって、東北地方北部とのかかわりをどう評価するかは難しい。上述のように東北地方北部ではフラスコ状土坑、すなわち貯蔵用の穴を墓に転用する伝統はあっても、居住施設をそのまま墓に転用する伝統は希薄か、ないしは明示的ではない。しかし、少なくとも遺体を納めた後埋め戻さずに安置したままの「廃屋墓」が同じ東日本で時間的にやや先行してあることは、「大型不整形土坑」の出現に何かしらのかかわりがあったと考えるのが自然である。改めて振り返っておくのは前節でみた深渡遺跡、深渡A遺跡の「擬似的住居」との関係である。

墓地としての環状列石 伊勢堂岱遺跡では居住施設と目される竪穴建物跡は見つかっていない。「大型不整形土坑」を含む土坑墓群と埋設土器、そして環状列石と、環状列石外周の6本柱亀甲形プランの建物遺構35棟が全体を構成する要素である。建物遺構は大湯環状列石や高屋館跡にも備わっており、米代川流域の環状列石では共通して認められる構成要素である¹⁰¹。径80cmを越える大きな柱穴の建物跡が含まれること、頻繁な建て替えを示す柱の抜き取り痕を断面で確認できること、亀甲形プランの外に張り出した柱穴を結ぶ中軸線が列石の描く円の接線となるよう、全体のどの位置にあっても環状列石との厳密な対応関係を守って配置することを大きな特徴とする。伊勢堂岱遺跡ではその配置により、調査区外に列石Aとは別の列石Cの存在が予測され、結果、遺跡保存へもつながった（小林 2005）。

「大型不整形土坑」、建物遺構、そして環状列石の時間的先後関係を見ると、伊勢堂岱遺跡の場合、環状列石を作る直前の地業により列石内部の「大型不整形土坑」が削られ、さらに全体で35棟あるうち列石Cをめぐる19棟の建物遺構の一部柱穴が、「大型不整形土坑」の埋土を掘り込んでいる。すなわち「大型不整形土坑」は列石Aを作るための地業以前＝列石A構築以前、かつ、列石Cと厳密な配置対応にある建物遺構以前＝列石C構築以前の遺構である、ということが出来る。前項で考えたように「大型不整形土坑」には遺体安置の性格、一次墓葬としての性格があるが、報告も述べるようにそれは列石Aや列石Cを作る時点では既に役割を終えていると見られる。果たして墓地とはかかわりない新たなモニュメントとして環状列石が作られ、それまでない居住施設として列石外周をめぐる建物が作られたのだろうか？しかし、報告書では列石Aの

内部にも削平を受けない小判形もしくは楕円形の土坑墓があり、列石構築以降に作られた墓であることを述べる。列石以前の墓地としての性格は環状列石が構築された以後も引き継がれている。とすれば「大型不整形土坑」が一次葬墓として機能した際の再葬システムはどうなったか、おそらく、それは環状列石外周をめぐる建物遺構に引き継がれたと考えられる。大湯環状列石、万座列石の外周にこの20年あまりの間に発見された建物遺構の分析を通して、筆者はそれら建物遺構がその内側の墓地、すなわち環状列石を構成する組石と一定の関係があることを明らかにした（小林 2010）。建物遺構のあり方は前述のように高屋館跡、伊勢堂岱遺跡とも同じである。建物遺構が内側の墓地空間となんらかの対応関係をもつと考えられるのは高屋館跡、伊勢堂岱遺跡の場合でも同様なはずである。伊勢堂岱遺跡の環状列石以前の「大型不整形土坑」を考えれば、建物遺構に与えられるのは居住施設の性格ではあり得ない。この時期に限っていえば米代川流域の環状列石外周に作られる亀甲形を中心とする建物遺構は、台上葬のような一次葬墓の機能をもつ建物と想定しておくのが、現状ではもっとも無理のない理解である。

ところで東北地方北部から北海道にかけての環状列石にほぼ共通することとして、列石の中央にも小型の環状配石もしくはそれに代わる大石が置かれていることがある。大湯環状列石の万座、野中堂での内側および外側の二重の環は伊勢堂岱遺跡列石Cや青森市小牧野遺跡、北海道森町鷺ノ木遺跡、小樽市忍路環状列石にも認められる。この特徴を捉え、床面中央に石囲炉のある堅穴建物跡の相似形ととらえることはすでに何人かが説いている。筆者も基本的に同じ意見をもつが、加えてこれもまた「擬似的住居」の造型の一つと理解する（小林 2011）。中期後葉の「擬似的住居」である、深渡遺跡SI2001、深渡A遺跡SI29では堅穴壁面、および壁際を埋め立てた上でプラン外周への石積みないし配石で、死者を送る儀礼空間が整えられた。そしてそれが埋まった後に小環状配石を切って土坑墓が作られてもいた。葬送空間として機能した堅穴に、埋まった後にさらなる埋葬のため土坑を掘るのは、伊勢堂岱遺跡の「大型不整形土坑」にも通じる特徴である。いずれも死者送りの祭祀・儀礼がその契機にある。円形堅穴とその中央に位置する石囲炉を引き写しに拡大し石の並びで表現した米代川流域の環状列石は、同じ意味の造型であり、葬送の仕組み、すなわち再葬システムの強化、再編成の結果とみなせる。環状列石もまた「擬似的住居」としての墓地であり、背景レベルでは関東地方中期後半の「廃屋墓」の墓制とも繋がると言えよう。

漆下遺跡 米代川流域の環状列石は本流と支流との合流点近くに位置する。伊勢堂岱遺跡は小猿部川、大湯環状列石は大湯川、また、大湯環状列石から南西に4.5km離れた高屋館跡は根市川、間瀬川との合流点にある。環状列石を構成する石はそれぞれが位置する本流では採取できず、支流ないしさらにその分流を上った地点から運ばれている（小林 2011）。環状列石が本支流の合流点に位置し離れた場所から石が供給されていることは、石の採取地を含み込む範囲が環状列石の造営にかかる一つの領域であったことを意味する。そして、その領域どうしは環状列石の位置する本流を介し相互に連絡しうる関係にあった。「大型不整形土坑」や環状列石を圍繞する亀甲形

建物遺構が共通してあることは、こうした事情も働いた結果である。

ところが、これら本流沿いとは異なって支流をほぼ上り切った山間では、同じ後期の石造遺構としてもまったく別のあり方の遺跡が残されている。中期末の深渡遺跡、深渡A遺跡から僅か下流側にある漆下遺跡は縄紋時代前・中・後期、弥生時代、中世以降に複合した遺跡であるが、うち中心となる後期前葉から後葉では竪穴建物跡13棟、掘立柱建物跡104棟、土坑330基、フラスコ状土坑89基、配石土坑80基、配石遺構28基、土器埋設遺構4基、捨て場(斜面盛土)5箇所が見つかった(図13/秋田県教委 2011)。数の多い掘立柱建物跡および土坑群(うちには楕円形の土坑墓も含まれる)、フラスコ状土坑は広く削平を受けた西側の平坦面にあり、膨大な遺物を包含した捨て場はそのまわりを囲んである。遺跡直下の河床を供給源とする河原石を使った配石土坑、配石遺構はこれより狭い東側の平坦部にあるが、同じく削平を受け一部は盛土されている。配石土坑は明らかに墓と目され、SKQ215のように楕円形土坑の内側に沿って小さな扁平礫を何重かにわたりめぐらした形や、SKQ222、268のように円形の土坑の縁4箇所と中央1箇所に扁平礫を置き石したもの、そしてSKQ221のように楕円形土坑の埋土中位に石組した上にさらに土坑の縁に沿って扁平礫をめぐらした例などがある(図13右下)。これらのなかには手厚い葬送であることを示すように、垂飾品類が出土した例がある。そして、この配石土坑群の西側に沿っては、下部に墓坑をもたない配石遺構がある。大礫で背中合わせの弧状立石列を組み、その内側に小礫で「田」+「ハ」字形を組んだSQ225、両端に石囲状の石組をもちその間を2列の石で結んだSQ218・219・220、内側に焼土の広がりをもつ弧状の配石SQ223などである(図13上)。

漆下遺跡の遺構は後期中葉になされた平坦面造成の削平前後で分けられるが、東側の配石土坑および配石遺構はいずれも中葉から後葉におかれる。そして西側削平面にも中葉の造成後に作られた墓と目される楕円形土坑のいくつかがある。この時期には遺跡よりも一段高い段丘面に位置する二重鳥D遺跡、二重鳥E遺跡、二重鳥H遺跡でそれぞれ12、6、9棟の竪穴建物跡が見つかり、一時的な集住と評価されるが、おそらくは漆下遺跡の東側配石土坑や西側の楕円形土坑の被葬者は、これら一段高い段丘面に暮らした人々であったろう。配石のある墓とそれがない墓が東西に地点を違えてあることは、被葬者間の階層差が現れたものと解釈される。同じように東側では「祭壇」とも呼べるような配石遺構群があり、西側では「送り場」としての捨て場(盛土)があって、葬送儀礼も地点で異なっていたと解される。

本流側では比較的広い領域に生活したいくつかの集団が共同で営んだ墓域として環状列石を残したのに対し、支流を上った山間では一時的な集住状況の下、環状列石とは異なる配石土坑、配石遺構を墓域として残していた。そこでは本流側の環状列石に対し、比較的明瞭な集団内の階層性を読み取ることができる。

田面木平(1)遺跡・丹後谷地遺跡一環状列石のない遺跡— 東北地方北部から北海道にかけての環状列石はその全域に分布するのではなく、河川の本支流で異なることを前項で見た。そして日本海側に注ぐ米代川流域、あるいは青森県津軽地方から青森平野にかけては環状列石を見るこ

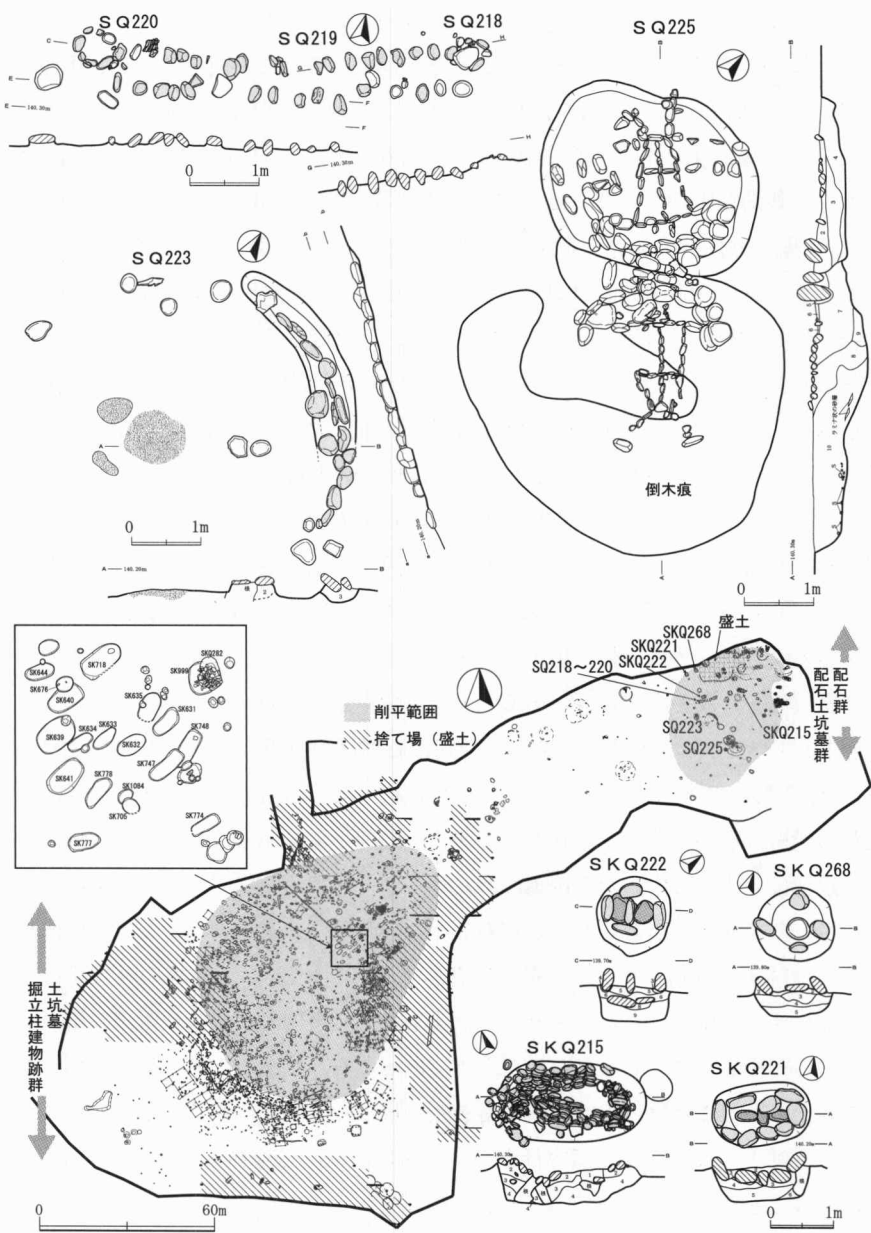


図13 漆下遺跡 配石および配石土坑墓群

とができるが、八戸市周辺ではそれを見ることがない。しかし、前葉から中葉にかけての特徴的な集落遺跡がある。

田面木平（1）遺跡は八戸市南西部、標高80～100mの丘陵斜面にある遺跡である。縄紋時代の竪穴建物跡として前期初頭から後期中葉まで32棟を確認しているが、うち中心となるのは後期前葉の19棟からなる集落である（図14/八戸市教委 1987）。19棟の建物跡は標高85～90mの斜

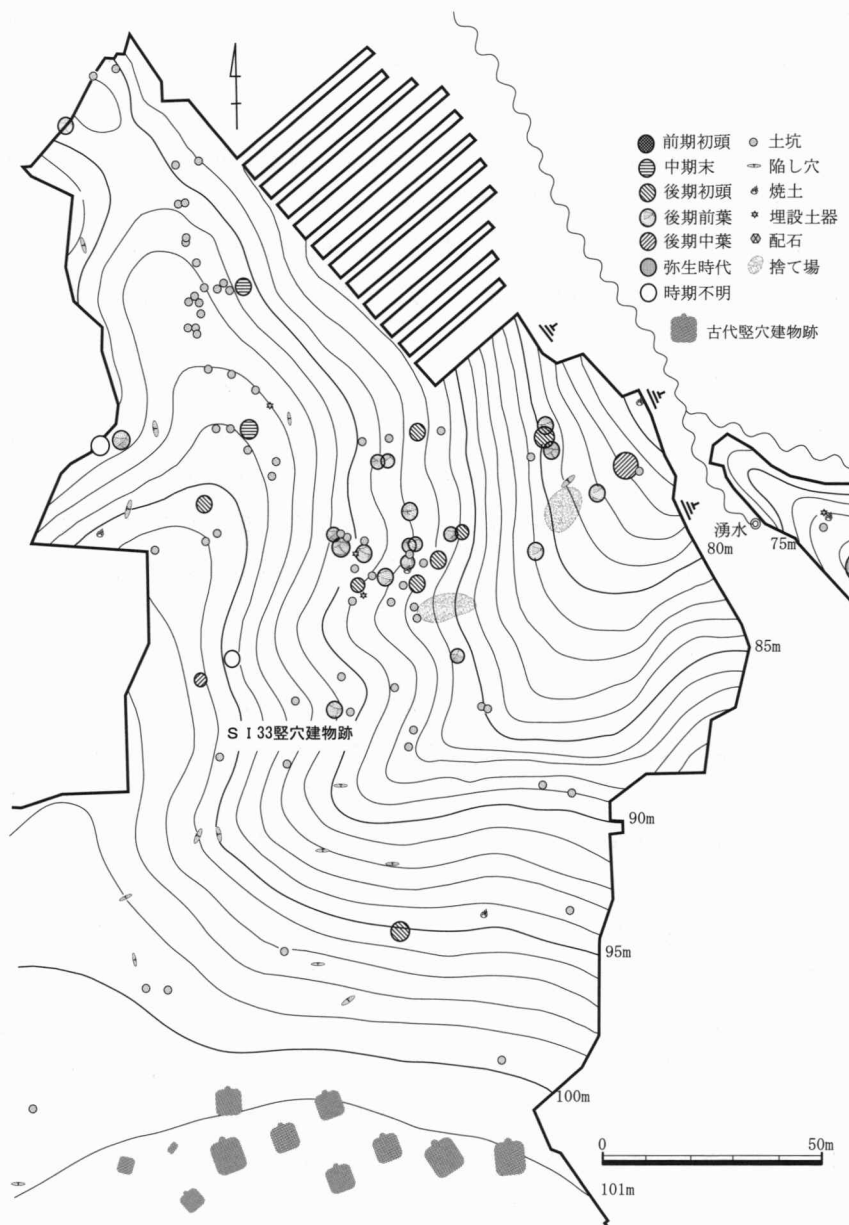


図 14 田面木平 (1) 遺跡 SI33竪穴建物跡位置

面中央径30mほどの範囲に一部重複しながら9棟があり，残りの10棟はそこから離れて斜面に散在する。斜面中央の9棟が立地する南側に接する地点と，斜面を北東側に下りた場所には捨て場があり，土器および石器類が多く出土している。

注目されるのは9棟の集中する斜面中央から40mほど南の標高91mあたりに，他からは離れて1棟見つかったSI33竪穴建物跡である（図15）。直径3.15m，床面積6.2㎡の小型円形の竪穴建

物であり、斜面上方の西壁に沿って周溝が半周ほどめぐり、そのなかを中心として8つの柱穴がある。特徴的なのは床面中央からやや東に寄って見つかった、55×72cmの石組炉である。合計28個の石を用いて円形に組み、床中央に近い西側には半分に割れた石皿が扁平礫4個の上に置かれ、東側では直径10cmの石2個に挟まれた直径25cmの石が男根状の立石として石皿に向かい合っていた。炉の東側壁には台形の配置に4つのピットがある。報告では「出入口」のピットとされるが、石組炉との近さを考慮すれば炉と組み合った祭壇を据えるためのピットではなかったろうか？きわめて象徴的な形態の炉であるが、報告でも呪術的な行為をなすための建物跡でなかったか、としている。

SI33堅穴建物跡の石組炉は石皿が女性を立石が男性を表し、それらが共に火床を挟んで向かい合うという関係で作られている。前節、樺山遺跡までに見た男女の「性的原理」が同じ堅穴建物内というだけでなく、同一の炉に2つとも組み込まれ、それが堅穴の特異性をいっそう際立たせている。報告が指摘した呪術的行為は間違いない。SI33堅穴建物跡は米代川流域などで環状列石が登場する後期前葉に属する。先にも述べたようにこの時期の東北地方北部の環状列石は「擬似的住居」としての造型的な機能をもつが、その際に重要な役割を果たすのが、列石のなかで炉の表現となる内側の環ないし中央帯の列石である。田面木平（1）遺跡では墓域としての性格を示す遺構は明かではないが、「性的原理」で構成された石組炉の堅穴建物内で、環状列石で執り行われたと同じような祖霊を祀るような儀礼がなされたのではないだろうか？

中期の石棒が堅穴内で火を受け破碎して残されることにも示されるように、元来、堅穴の炉は調理や採暖など実際の機能ばかりでなく、なにかしら象徴的な儀礼の中心的な場としての役割があり、それが田面木平（1）遺跡では「性的原理」と結びついて存在した。男女の「性的原理」は備えないものの炉が象徴的に造型されるのは、環状列石のある津軽地方や米代川流域にもある。白神山地の北麓、西目屋村にある砂子瀬遺跡では屋外炉としてではあるが、特異な形状の石囲炉が見つかった（図16左/青森県教委 2009）。大きさ10～30cmの扁平な石を横に2、縦に1と規則的に配列し1辺およそ1mの方形に組んだ炉である。一部に焚き口のように石を組まない辺があるが、組み方は明らかに青森市の小牧野遺跡や伊勢堂岱遺跡の環状列石一部に認められるのと共通する。同じような炉は小牧野遺跡にもあり、また秋田県能代市烏野遺跡SI521堅穴建物跡の石囲炉にもある（図16右/二ツ井町教委 1995）。いずれも環状列石と同じ時期の大型炉であり、石の組み方はいわば「擬似的環状列石」とでも呼べる。おそらく田面木平（1）遺跡SI33堅穴建物と同様に、呪術的な働きを担って堅穴内外の場に設けられ、環状列石の「擬似的住居」の造型と相互の関係をもって成立した炉である。

田面木平（1）遺跡から東に1kmほど離れた地点、馬淵川と新井田川の間に流れる土橋川に沿ってあるのが、丹後谷地遺跡である。南に面した標高45～55mの斜面上に、縄紋時代の堅穴建物跡を62棟確認した。このうち、中期末が8棟、後期初頭が13棟、後期前葉が20棟、後期中葉が13棟、後期後葉が7棟ある（図17/八戸市教委 1986）。これら堅穴建物跡はほぼ東西に長い調

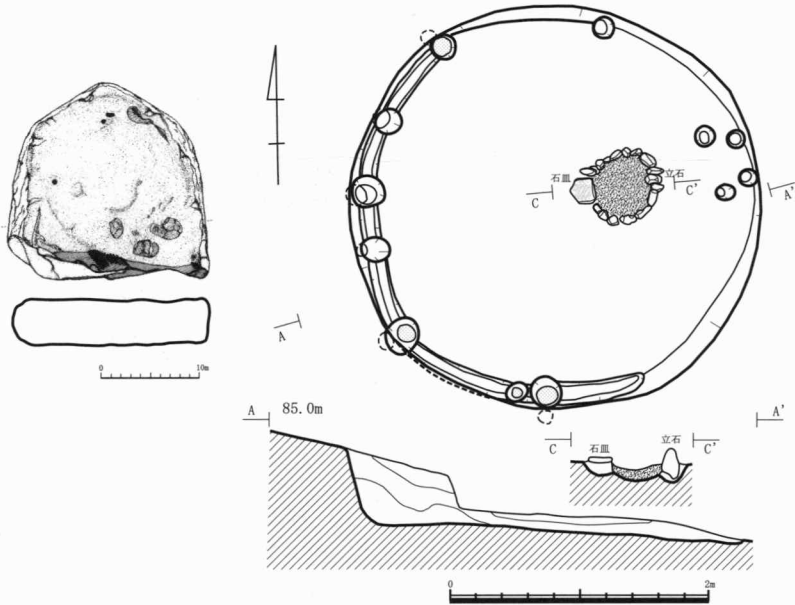


図15 田面木平(1)遺跡 SI33竪穴建物跡と石囲炉使用石皿

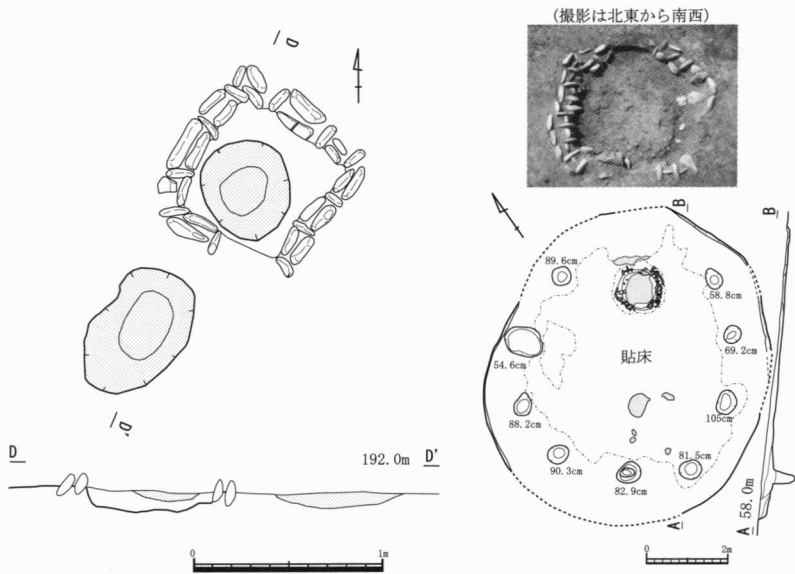


図16 砂子瀬遺跡(左)屋外炉と烏野遺跡(右)SI521竪穴建物跡の石囲炉

査区内で、東・中央・西と大きく3つのブロックに分かれている。東側ブロックでは中期末、後期前葉、後期後葉の建物群が、中央ブロックでは後期中葉の建物群に数棟の前葉の建物が混じり、西側ブロックは後期初頭の建物群で占められる。中期末を始まりとして、東(中期末)→西

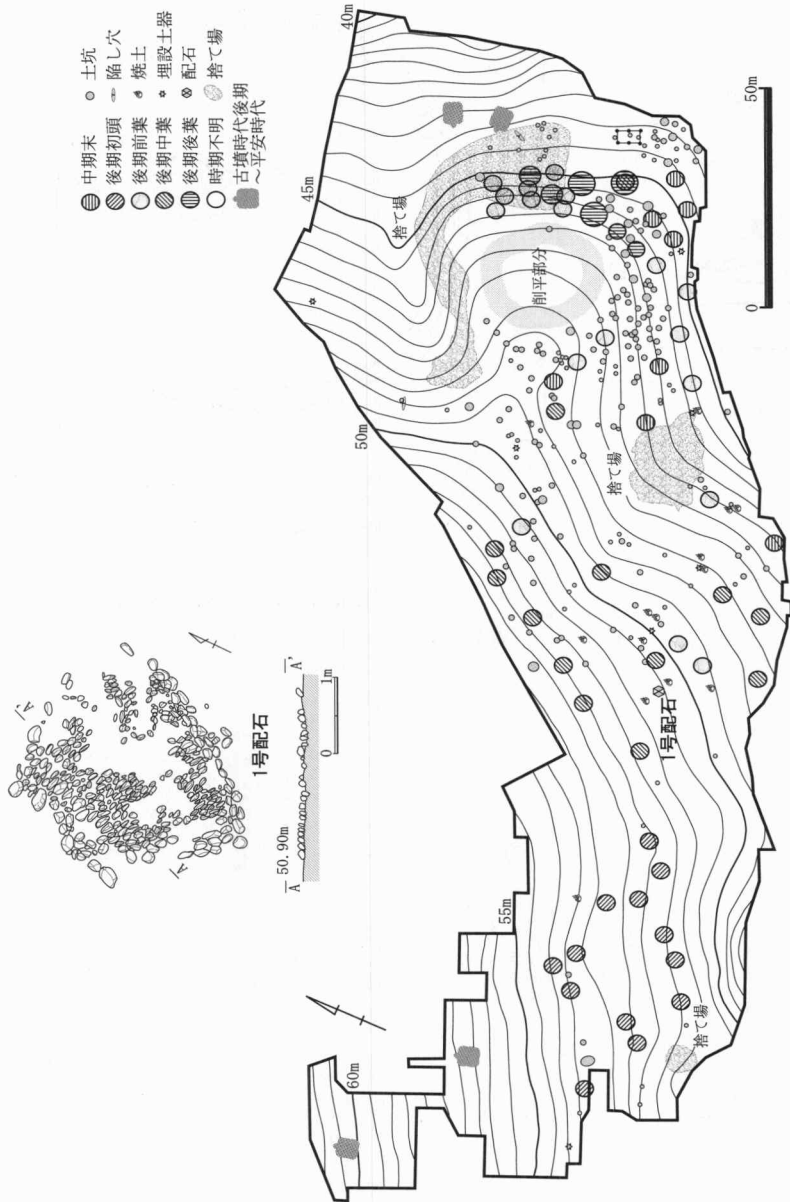


図 17 丹後谷地遺跡 削平部分と捨て場・1号配石

(後期初頭)→東(後期前葉)→中央(後期中葉)→東(後期後葉)と集落の中心が移動したことを示す。

集落中心の移動に伴い、捨て場も3箇所形成されるが、うち最も広くあるのは3期にわたり繰り返し建物群が立地した東側ブロックの北側である。そして注意するのはこの東側ブロックの捨て場に囲まれるように、22×25mの範囲で削平された範囲があることである。報告書の航空写真にも全体黒褐色の調査区に、はっきりと地山の黄褐色土が露出するのが見てとれる。後世の削平と判断されたためか時期の記述はないが、東側ブロックでの捨て場の形成に伴い削平された

痕跡と見るべきで、捨て場に遺物がない中期末は除外した他の2時期、後期前葉と後葉とに作られたと判断される。伊勢堂岱遺跡の環状列石構築直前や、漆下遺跡後期中葉の大規模な削平による地業と同じ意味でなされたのであろう。東側ブロックにはフラスコ状土坑を含む多数の土坑群があるが、これらが墓坑として利用されたのであれば、伊勢堂岱遺跡における「大型不整形土坑」と同様の遺構の可能性がある。環状列石を作らないこと、そして堅穴建物群が周囲を囲んでいることが、米代川流域の場合と異なる点である。なお後期中葉の建物群が位置する中央ブロックには焼けた礫を集めた配石がある。東側ブロックの地業が後期前葉の祖霊祭祀的空間の造成にあるとすれば、この配石は中葉での祭祀遺構となろう。また西側ブロックには捨て場が伴い、建物群の中央に等高線が開く部分を見てとれる。明瞭な削平とは認められないまでもある程度の空間造成をした可能性はあろう。

風張(1)遺跡 八戸市南西部での後期の集落は田面木平(1)遺跡や丹後谷地遺跡から、その後にはさらに東側、新井田川を越した地点の風張(1)遺跡と移る。主体となる後期後半の集落は堅穴建物跡187棟、掘立柱建物跡22棟、土坑341基、土坑墓130基からなる(図18/八戸市教委1990・2008)。図が示すように中央に2つの墓域(東群・西群)があり、それを取り囲んで掘立柱建物跡と土坑群が、さらにその外側に堅穴建物跡群がめぐるという構成の集落である。報告では土器型式の差から堅穴建物跡群について4期の変遷があるとするが、全体的に中葉段階に南側に集中した建物群が後葉から末には北西側に移る変化があった、と整理されている。

風張(1)遺跡で注意されるのは、15号堅穴建物跡から出土した「合掌土偶」と144号堅穴建物跡から出土した「頬杖土偶」の出土状況である。15号堅穴建物跡出土の「合掌土偶」は「H」字形の溝が掘られた建物出入口の反対側、奥壁に掛かるように出土し、左脚はさらにそこから2mほど西のやはり壁際から出土した。土偶の前には床面中央の炉とは別に焼土があるなど出入口と反対側に祭壇的な場があったと推定されている。144号堅穴建物跡の「頬杖土偶」は建物跡西壁近くで出土した。出入口との関係は不明である。土偶は伴出土器から144号が後期中葉、15号が後期後葉とされる。両者には少しの時間のずれがあり、特異な形状の土偶を祀った儀礼空間は前者から後者へ移ったと見られる。しかし、いずれもが集落全体のなかでは南側の一角にあり、そこが集落内での土偶祭祀を司った位置であったことが知られる。

2) 晩期の遺構

晩期にも青森県弘前市大森勝山遺跡、岩手県八幡平市釜石環状列石など、規模の大きな環状列石がある。しかし、これらが後期前葉に登場する環状列石とどのような系譜にあるかはわからず、墓域とのかかわりも不明である。対して小規模な配石ながら、中期以来に明示的な男女の「性的原理」と、後期以来の石囲炉に込められた象徴性が組み合った祭祀・儀礼遺構がある。

向様田A遺跡 深渡遺跡、深渡遺跡そして漆下遺跡のある米代川水系、支流阿仁川を上り分流小又川を入った山間の晩期前半を中心とする遺跡である。漆下遺跡が小又川左岸段丘上であるの



図18 風張 (1) 遺跡と土偶出土位置（小林圭一氏トレース）

に対し、向様田A遺跡は隣接するB遺跡、C遺跡、D遺跡と一連になって右岸上に位置する。遺跡は土坑175基、配石遺構36基、土器埋設遺構2基などが調査され、土坑からは装身具である玉類が出土し、遺跡が基本的に墓地であろうと考えられた（秋田県教委 2003・2004・2009）。深渡遺跡、深渡A遺跡など中期末の竪穴建物跡に端を発し、環状列石の構成にもかかわる「擬似的住居」の伝統は、この向様田A遺跡では晩期まで繋がったようで、土坑群の分布から西側に位置する「東部環状配石遺構」とその北側に広がる石囲の配石炉群はそれを示すものである。

「東部環状配石遺構」（図19右上）は中心部に直径1.5mの石囲炉状の配石があり、その周囲に石のない空間があってその外側に石が積み上げられている。積石の範囲は直径13mであり、高さは40cmほどある。石囲炉状の中心部配石の周囲を精査したところ、4箇所の柱穴位置に組まれた石組の一つから石刀が折られた状態で出土した（図19右）。この「東部環状配石遺構」の北側からは石囲炉状の配石が22基確認された。竪穴床面や柱穴をとまわず、いずれも墓域に隣接してなんらかの儀礼が執り行われた遺構と判断された。そのうちでもSQ135、SQ353は特異な

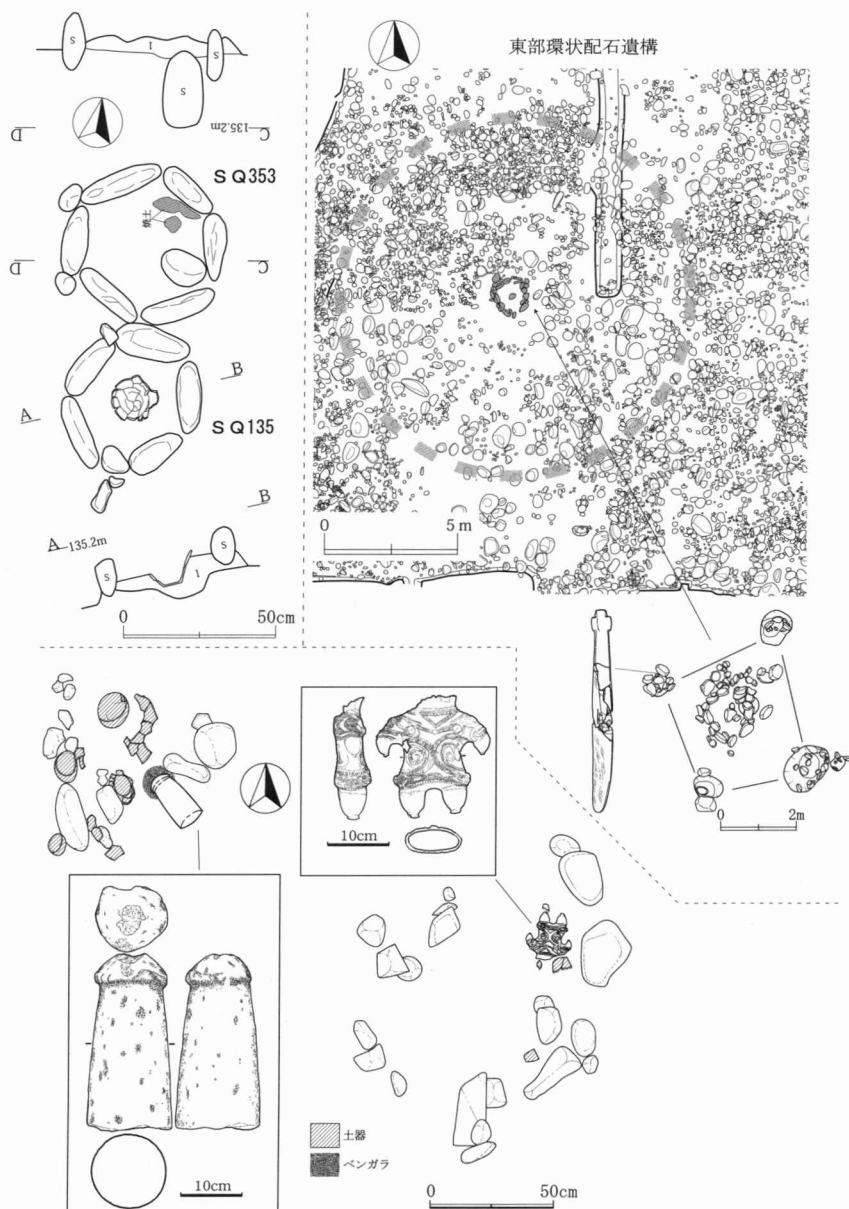


図19 向様田A遺跡 東部環状配石遺構, SQ135・353石囲炉状配石遺構, 土偶・石棒祭祀遺構

状況を示している(図19左上)。SQ135, SQ353はそれぞれ1m程度の円形に6個ほどの扁平礫で石囲を施し, 135は中央に埋設土器を, 353は石囲内の東側に寄せて立石をしつらえていた。埋設土器と立石によって女性, 男性を表現した「性的原理」にしたがった配石と考えられる。隣り合った遺構が対の性特徴を示す遺構はほかにもある。墓域のなか, 南西部捨て場の一角に組まれた石囲炉状配石から頭部を欠いた晩期前葉の土偶1体が出土し, その北西側0.7mほどの距離を

において男根形の石棒が頭部にベンガラを散布した状態で見つかった（図19下）。これもまた土偶が女性、石棒が男性を表す「性的原理」が対になって確認された例である。

向様田A遺跡では「擬似的住居」の伝統で捉えられる「東部環状配石遺構」と、男女の「性的原理」に基づいて作られたSQ135、SQ353石囲炉状配石、そして土偶および石棒が対に残された遺構が、墓域に接して存在した。墓域で執り行われた儀礼にこの2つの原理が働いていたことになる。

Ⅲ 東北地方北部縄紋時代祭祀・儀礼遺構のシンボリズム

1) 竪穴建物と祭祀・儀礼遺構

祭祀・儀礼遺構が竪穴建物跡とかかわって確認された例をこれまで述べたなかから抽出すれば、中期では坂ノ上F遺跡の大型の15号竪穴建物跡での被熱破碎石棒と土偶との共伴例、大畑台遺跡での複数の竪穴建物跡から石棒および埋設土器・石皿が分かれて出土した例、後期では田面木平（1）遺跡での石囲炉に石皿と立石が組み入れられたSI33竪穴建物跡例、これと同じような意味の烏野遺跡の「擬似的環状列石」と呼ぶような石囲炉を備えたSI521竪穴建物跡例、そして風張（1）遺跡で「合掌土偶」「頬杖土偶」の出土した15号および144号竪穴建物跡例があげられる。これらのなかで烏野遺跡と風張（1）遺跡を除いては男女対になった「性的原理」が表現された遺構である。

2) 竪穴建物外の祭祀・儀礼遺構

旧石器時代から繋がることが予測される草創期のデポはとりあえず措くとして、竪穴建物にかかわらない祭祀・儀礼遺構としては、詳細は不明なもの早期に始まる捨て場や貝塚にその初源を見ることができただろう。おそらくは、それら捨て場・貝塚からの装身具や土偶の出土を評価すれば、後の祖霊祭祀にも連なる「送り儀礼」を考えることが可能である（おかむら 2010）。

その後、前期の円筒土器文化の遺跡にみられる斜面や大型の竪穴建物周囲の盛土は、特異な遺物である岩偶が伴う点で祭祀的な遺構と評価できる。削平を伴った斜面の盛り立て行為の契機に岩偶が存在することで、空間造成自体に祭祀的な意味があることが想定される。はりま館遺跡SI152竪穴建物跡外周の盛土や大岱IV遺跡の斜面盛土をはじめとし、大館あるいは鹿角・小坂の円筒下層式期の遺跡群はその例である。

中期では日本海沿岸地域での石棒祭祀の遺跡があげられる。石棒自体は男性原理に基づく性崇拜の象徴的な遺物であるが、それが単独で樹立された坂ノ上遺跡（B地点）は竪穴建物から独立した施設内にあることで、オノ神遺跡例とともに居住施設外の祭祀・儀礼遺構と言って良い。これらにやや遅れた中期後葉に、北上川流域、樺山遺跡では石皿・立石を用いた男女の「性的原理」が墓上の配石に表現され、同じような表現の配石は北部の馬淵川沿いの御所野遺跡でも登場

する。一方日本海側内陸、米代川水系の中期後葉には、竪穴建物を廃絶した後に石を積み上げて「擬似的住居」として機能させ、さらには小環状配石にする例が深渡遺跡、深渡A遺跡に見られる。それは後期前葉の同じ水系の「大型不整形土坑」および環状列石へと繋がり、伊勢堂岱遺跡ではその両者の変遷を見ることができる。「擬似的住居」は北上川流域の中期末～後期前葉でも、芋田沢田IV遺跡、清水屋敷II遺跡のような変化形として確認される。前期以来の削平・盛土は伊勢堂岱遺跡も含め後期を通して漆下遺跡、丹後谷地遺跡に確認できる。こみ入った造りの祭壇状配石遺構や配石墓を伴い、その要因の一つに墓域ないし墓地にかかわる祭祀空間の造成があったことは疑いない。晩期にも向様田A遺跡のような「擬似的住居」の伝統は続き、石囲炉状配石には男女の「性的原理」を立石と埋設土器で表現したり、男根状石棒と土偶で示す例が現れる。そして、それらも墓地と結びついて存在する。

IV 収束

東北地方北部での祭祀・儀礼遺構を概観した。見えてくるのはそれと認められる遺構が、男女の「性的原理」と「擬似的住居」の表現にかかわって、各地域・各時期の居住形態にどう関係し発現するか、というさらなる疑問である。言い換えれば、集落構成単位である男女一対を核とした「世帯」が、集団全体のなかからどのように現れその後にその相対的位置をどう変化させるか、の問題である。

冒頭に東北地方では、円筒土器の地域圏と大木式土器の地域圏とが前期に分立すること述べた。このうち前者は後期に環状列石の分布圏に引き継がれる。前期から中期を通し円筒土器の密度が高い地域は日本海側ではおよそ米代川水系までであるが、その南の男鹿半島では中期前半に「性的原理」に応じた祭式分掌がされる。さらに南の秋田平野御所野台地および以南では、大型竪穴建物内で石棒・土偶に男女両性を託した儀礼痕跡があり、ほかにも単独で石棒を樹立させる儀礼痕跡がある。北陸地方に関係するこれら石棒は一端に鏝が付く、ないしは有段になるなど頭部を表現し明らかに男性表徴であることを強調する。しかし、その分布は米代川水系を含め円筒土器の密度の高い地域へは広がらない。その密度が高い範囲にあるのは形態上より中性的な円柱形の端部彫刻石棒である。円筒土器の地域圏を引き継ぐ環状列石には、大湯環状列石のいわゆる日時計形組石に代表される立石が伴うことがあるが、これもまた性表徴は薄い。一方、太平洋側では石皿、立石で「性的原理」を表現した配石の墓地が北上川沿いの中期前半に登場し、後半には北部の馬淵川沿いでも認められる。そして、後期前葉には環状列石の分布しない太平洋側北部の竪穴建物跡の炉に同じ表現がなされる。対の関係で男女の「性的原理」を表わす傾向は円筒土器の地域圏よりも、北上川沿いなし後期前葉の環状列石の分布しない馬淵川沿いに濃く認められるのではないか。集団のなかの「世帯」の立ち現れ方はより明示的である。

一方「擬似的住居」は奥羽山脈の西側で観念的にも生長し、「大型不整形土坑」を経た墓地で

環状列石という形にまで変化する。そこでは男女の「性的原理」は希薄であり、「世帯」の現れ方は暗示的である。本来、1個の個人そして男女の対を核とする「世帯」、さらにそれらを累世的に繋いだ氏族的系譜ごとに造られ祀られるべき墓だが、環状列石という石囲炉を備えた住居の大型モデルで、それらの集合からなる集団全体の墓にまとめられる。イエの概念が大きく変わり背後の再葬システムも、台上葬を想定させる環状列石を圍繞した建物遺構で強化される。このような葬制とそれに基づく祖霊祭祀による集団再統合は、あるいはこの地域での前期の集団的祭祀への回帰と評価することも可能かも知れない。土偶と異なり性表徴を明示しないヒトガタ造型、すなわち岩偶が、大型の建物跡周囲の盛土や台地上面の削平と斜面への盛土など、公共的な営為にかかわり残されることは、前期の祭祀が個別的ではなく社会集団全体でなされたことを示唆する。円筒土器の地域圏は社会を繋ぐ観念的特性にも現れている。米代川水系では墓域造営にかかわって「擬似的住居」は晩期まで続くが、そこでは男女の「性的原理」も同様に表現される。亀ヶ岡文化の広域性が圏域を超えて祭祀の原理を変えたのであろうか？

以上、東北地方北部縄紋時代の祭祀・儀礼遺構にかかわるシンボリズムとその変遷から読み取られた、議論の必要な一つの解釈である。

謝辞

本稿を草するにあたり、岩田貴之（北上市教育委員会）、小林圭一（山形県埋蔵文化財センター）、斉藤慶吏（青森県教育委員会）、嶋影壮憲（大館市教育委員会）、高田和徳（一戸町教育委員会）、高橋龍三郎（早稲田大学）、茅野嘉雄（青森県教育委員会）、柳澤清一（千葉大学）各氏からご教示を頂戴しました。記して謝意申し上げます。

註

- (1) 過去の精神文化を扱うことについては、次のような言葉で自覚的であることがしばしば促される。
「祭祀・儀礼にはシンボル（象徴）がともなうため、考古学者にはアプローチしやすいという印象をもつ人が多いかもしれないが、その一方では、遺構や遺物の機能がわからないものは、祭祀・儀礼に結びつけられやすいという傾向もあることを忘れてはならない」（田中 2004）、あるいは、
「祭祀ということがあいまいな言葉で、その内容がわからない場合が多いので、祭祀遺跡の様相も多種多様で、明確でないものが多い」（吉田 1979）
精神文化を言い表す祭祀・儀礼および信仰などの用語が、考古学では往々個別には説明できないことをくるむ代名詞として都合よく使われることへの警鐘である。使用する以上、まさしく過去の社会や文化の文脈で可能な限り具体的意味機能を指示する努力は必要であろう。
- (2) 考古学が推論可能な過去の1生産技術、2生業、3社会・政治的組織、4宗教組織ないし精神生活、の4つについて、この順で困難さが増すことを説明したクリストファー・ホークスの論を安斎正人氏が紹介している（安斎 2001）。3ないし4の課題に対し考古学の限界が端的に表れることが
「…未来の考古学者は考古学のみでメラネシア人の社会組織に対してのマリノフスキーの研究以上にいかに多くを推論できるか？否、この種の推論は間違いなくすべて簡単にはすまない。…広く知られる現代

に原始的生活をおくる人々の民族誌を、先史時代人の宗教組織や精神生活への想像を刺激するため利用することは可能である。しかし、その方法によって、かれらがどのような組織をつくり、どのような精神生活を送っていたかを論証することはできない。そして近代と先史時代との間にいくつかの接点を示すことなしには、それを希望することすらできない…」(Hawkes, C 1954)

と述べられる。「近代」に対する民俗(族)学と「先史時代」に対する考古学では方法が異なり、その間を繋ぐ論証は不可能、との言説である。しかし、ともに扱うアノニムな対象に対し「近代」と「先史時代」の区分がどれほど支配的かは、別に確認しておく必要があろう。接点を探り当てる可能性は零ではない。ホークスが述べるほどに悲観的にはならないが、多くは民俗(族)学からのアプローチが必要で、かつ意識的でなければならないことも理解する。

- (3) 考古学が民俗(族)学と完全に袂を分けた戦後の研究でも、背景にそれを意識することは必要だった。一見哲学的、社会学的な装いの「イデオロギー」という言葉で東北地方の縄紋文化を概説した林謙作氏の論(林 1965)にそれを読み取ることができる。たとえば、複式炉について「しばしば複式炉が出現し、東北の寒冷な気候によるものと説明されている。…しかし、この現象は“火”に関する観念が複雑化し、たとえば祭祀用の火と日常実用の火を区別するといった慣習の出現したことをものがたるのではあるまいか」(78頁)と述べる。ここでの「祭祀」は具体的に指示のない非日常、非実用の意味である。しかし、“火”にかかり、さらに「慣習の出現」と繋いで、民俗学でいう非日常の火、「産火」や「死火」を指示したことはあきらかだろう。同じく用いられた「狩猟儀礼」という言葉にも東北の民俗が示す具体的イメージがある。氏の論ではほかにも、秋田県杉沢台遺跡の前期の大型住居跡で「若者宿」を登場させ(林 1986)、青森県三内丸山遺跡、岩手県西田遺跡、秋田県大湯環状列石、福島県三貫地貝塚の墓制を述べて柳田国男の「祖先」(=「祖霊」)観を引用するなど(林 1998)、文化・社会を論じるにあたり民俗学的志向は強い。
- (4) 狼穴Ⅱ遺跡の発掘調査では岩偶は出土していない。しかし、稲野氏が掲げた狼穴遺跡の岩偶裏面に記された注記「昭和36. 5 釈迦内狼穴17 発掘」からは、この岩偶が調査区付近から採集されたものとして良いようである(嶋影壮憲氏教示)。
- (5) 筆者は後述の坂ノ上遺跡(B遺跡)、才の神遺跡の事例同様、端部彫刻石棒も側縁の平坦面が上側を向くようやや斜めに立てて用いたのではないかと考える。平坦面は他の形式の石棒でも擦り面として残され、石棒を用いた儀礼にその一面を擦る行為があったと考えるからである。端部彫刻石棒の平坦面もその表れではなかったか?
- (6) 関連して想起されるのは、長野県与助尾根遺跡の集落について「石棒祭式」「石柱祭式」「土偶祭式」を管掌するそれぞれの社会単位で分析した、水野正好氏の三祭式分掌論である(水野 1963, 小林 2010)。それから導かれた社会組織論には批判も多いが、特定のシンボルで示される祭式が集落内で分掌されていること自体は大畑台遺跡でも共通することとして注意すべきであろう。
- (7) 岩田貴之氏教示の報告書(北上市教委 1977)の記述を根拠とする。なお、江坂輝弥氏等による当初の調査でも配石遺構から大木8b式と9式の土器片を確認している(北上市教委 1954)。
- (8) 別に述べるべきことであるが、東日本には「臼」が葬礼に象徴的に用いられる民俗がある。たとえば、山形および宮城南部、福島北部では埋葬後、家に帰り着いたら臼に載せた(ないし臼を描いた絵の下に置いた)塩・みそ・水で浄めて家に入る。茨城・埼玉・群馬・東京・千葉・神奈川にも同じ儀礼がある。また、佐渡では出棺後、棺を安置した座敷に臼を転がす儀礼がある(文化庁 1980)。粉挽きないし搗くための道具として石皿は臼と共通の品であるが、それらが墓や葬礼で用いられることにも共通した意味があるのかも知れない。そうした追究も一方では必要であろう。
- (9) 東北北部の張り出し部をもつ柄鏡形住居に類似した遺構は芋田沢田Ⅳ遺跡と同じ後期前葉例もあるが、

大湯環状列石万座列石外周北側（鹿角市教委 2005：SX(S)301, SX(S)401, SX(S)402, SX(S)03 など）や花巻市稻荷神社遺跡（花巻市教委 2009：第3号住居跡，第7号住居跡）では加曽利B式併行の後期中葉まで下降する。

- (10) 朝鮮半島の民俗には草墳・草殯と呼ばれる再葬を前提にした一次葬墓がかつてあった。土中に埋めず石積みの上に安置した遺体や棺を藁で屋根を葺くように覆ったり，四隅に杵を立てた台上葬であったり，さらには菰にくるんでの樹上葬であったりと，その状況は様々である。しかし，いずれも土中に穴を掘り遺体ないし棺を納めた後に埋め戻す土葬ではなく，地上ないし空中葬であることでは一致する。文献上の記録や支石墓とのかわり方で，そうした葬俗は紀元前7～8世紀まで遡って考えられるといわれる（李1979）。東北地方北部に環状列石が登場するころには，青森天狗岱，久栗坂など早くから知られた再葬甕棺がある。その一次葬にはこうした朝鮮半島ないしより北方の大陸諸民族の葬法も充分に参考になる。
- (11) 亀甲形建物遺構は後期の所産であるが，6本柱の建物遺構自体は東北北部でも秋田県能代市二ツ井烏野遺跡や，岩手県御所野遺跡の大木8b式を中心とした中期後半にすでにある。御所野遺跡では柱穴に木炭が詰め込まれるなど，通常の柱穴とは異なる特徴が見られた。亀甲形建物遺構の柱穴配置はこの中期後半の6本柱建物の中2本が外側へ位置をずらした配置であり，むしろ構造上の系譜はこの両者に強く認められる。機能および意味上の共通性については居住形態の違いを含めての検討が必要である。

引用・参考文献

- 阿部昭典 2010 「東北北部の大形石棒に見られる地域間交流」『縄文人の石神—大型石棒から見る祭儀行為—発表資料集』
- 安斎正人 2001 「2000年度東海大学史学会大会公開講演 現代考古学のパラダイム転換」『東海史学』第35号
- 稲野裕介 1993 「円筒土器に伴う岩偶（1）」考古学ジャーナルNo.362 ニュー・サイエンス社
- 稲野裕介 1997 「円筒土器に伴う岩偶（2）」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（1）』勉誠社：401-409
- 宇田川浩一 2009 「縄文時代前期の集落」『2009年度山形大会研究発表資料集』日本考古学協会
- 江坂輝弥 1963 「秋田県鹿角郡小坂町内岱遺跡出土の岩偶と岩版について」『史学』35-4
- 奥山 潤 1971 『茂屋下岱式土器群』秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古班
- 海藤 元 2013 「配石遺構からみた米代川上流域における縄文時代中期末～後期中葉の集落構造の変遷」『研究紀要』12，東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 金子昭彦 2014 「大木式北部・板状裾脚土偶の編年」『岩手考古学』第25号
- 小林 克 1997 「縄文のムラ，墓と祈り」岡村道雄編『ここまでわかった日本の先史時代』角川書店：262-283
- 小林 克 2003 「地形の判読」『秋田県埋蔵文化財センター紀要』17：23-31
- 小林 克 2005 「伊勢堂岱遺跡」『第3次埋蔵文化財白書』日本考古学協会
- 小林 克 2007 「環状列石（東北・北海道地方）」『縄文時代の考古学 11 一心と信仰—』同成社：145-157
- 小林 克 2010 「環状列石と建物遺構」菊池徹夫編『比較考古学の新天地』同成社：125-136
- 小林 克 2011 「米代川水系の縄紋社会史—円筒土器文化から環状列石まで—」『季刊 東北学』第26号，東北芸術大学東北文化研究センター：23-43
- 斉藤慶史 2011 「青森県域における縄文早期の様相」『縄紋時代早期を考える』東北芸術工科大学
- 菅原俊行 2002 「坂ノ上F遺跡」『秋田市史 第6巻 考古 史料編』秋田市：232-243

- 高橋 学 1993 「森吉町長野岱Ⅰ遺跡採集の岩偶」『秋田考古学』第42・43合併号
- 高橋龍三郎 2007 「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学 9 死と弔い』同成社
- 田中良之 2004 「祭祀」『現代考古学辞典』安斎正人編, 同成社
- 茅野嘉雄 2013 「三内丸山跡の石刀類・石棒について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』16 青森県教育委員会
- 富樫泰時 2007 「集落遺跡に視る土器文化の変容について」『あきた史記 歴史論考集』6, 秋田姓氏家系研究会: 7-19
- 林 謙作 1965 「縄文文化の発展と地域性—東北」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社: 64-96
- 林 謙作 1986 「Ⅱ 縄文時代」『図説 発掘が語る日本史 第1巻 北海道・東北』新人物往来社: 70-112
- 林 謙作 1998 「縄紋社会は階層社会か」『古代史の論点』4, 小学館
- 文化庁 1980 『日本民俗地図 VII (葬制・墓制)』国土地理協会
- 水野正好 1963 「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』
- 吉田章一郎 1979 「祭祀遺跡」『世界考古学辞典 (上)』平凡社: 412
- 李 杜鉉 1979 「草墳」『葬送墓制研究集成 第5巻』名著出版: 406-417
- おかむらみちお 2010 「縄文時代「盛土遺構」研究のために」『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究—予稿集』
- Hawkes, Christopher 1954 "Archaeological Theory and Method: Some Suggestions from Old World", *American Anthropologist* 56, p162

発掘調査報告書等

秋田県

- 日本鉱業株式会社船川製油所 1979 『大畑台遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 1980 『才の神遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第71集
- 秋田県教育委員会 1984 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ—大岱Ⅳ遺跡など—』秋田県文化財調査報告書第120集
- 秋田県教育委員会 1988 『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第173集
- 秋田県教育委員会 1990 『はりま館遺跡発掘調査報告書 (上巻・下巻) Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第192集
- 秋田県教育委員会 1990 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ—高屋館跡—』秋田県文化財調査報告書第198集
- 秋田県教育委員会 1993 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ—萩ノ台Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第236集
- 二ツ井町教育委員会 1995 『烏野遺跡第6次発掘調査概報』二ツ井町文化財調査報告書第6集
- 秋田県教育委員会 1999 『池内遺跡—遺物・資料篇—』秋田県文化財調査報告書第282集
- 秋田県教育委員会 1999 『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第293集
- 秋田県教育委員会 1999 『深渡遺跡』秋田県文化財調査報告書第286集
- 秋田県教育委員会 2003 『向様田A遺跡 遺構編』秋田県文化財調査報告書第346集
- 秋田県教育委員会 2004 『向様田A遺跡 遺物編』秋田県文化財調査報告書第370集
- 秋田県教育委員会 2006 『深渡遺跡』秋田県文化財調査報告書第407集

東北北部縄紋時代祭祀・儀礼遺構のシンボリズムとその変遷（小林克）

- 秋田県教育委員会 2006 『深渡A遺跡』秋田県文化財調査報告書第408集
秋田県教育委員会 2007 『三ヶ田館跡』秋田県文化財調査報告書第417集
秋田県教育委員会 2009 『向様田A遺跡』秋田県文化財調査報告書第445集
秋田県教育委員会 2010 『狼穴Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第460集
秋田県教育委員会 2011 『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書第464集
秋田市教育委員会 1985 「坂ノ上F遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
北秋田市教育委員会 2006 『森吉B遺跡・二重鳥A遺跡』
鹿角市教育委員会 2005 『特別史跡 大湯環状列石（1）』鹿角市文化財調査資料77
- 岩手県
岩手県教育委員会 1954 『江刺郡稲瀬村樺山遺跡』
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2013 『芋田沢田Ⅳ遺跡・芋田沢田Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第604集
江坂輝弥・菊池啓次郎・司東真雄 1968 「北上市稲瀬町樺山遺跡調査予報―第一次―」『北上市史』北上市：31-58
江坂輝弥・菊池啓次郎・司東真雄・渡辺直径 1968 「北上市稲瀬町樺山遺跡調査報告―第二次―」『北上市史』北上市：59-117
北上市教育委員会 1977 『樺山遺跡調査概報』
斎藤尚・鈴木孝志・遠藤輝夫・江坂輝弥 1968 「北上市稲瀬町樺山遺跡調査概報―第三次―」『北上市史』北上市：118-167
一戸町教育委員会 1993 『御所野遺跡Ⅰ 縄文時代中期の大集落』一戸町文化財調査報告書第32集
東和町教育委員会 1998 『安俵6区Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
東和町教育委員会 2000 『安俵6区Ⅴ遺跡発掘調査報告書』
東和町教育委員会 2002 『清水屋敷Ⅱ遺跡発掘調査報告書―縄文編―』
花巻市教育委員会 2009 『稻荷神社遺跡発掘調査報告書』
- 青森県
青森県教育委員会 2009 『砂子瀬遺跡・水上（3）遺跡・水上（4）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第466集
青森市教育委員会 2004 『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』青森市埋蔵文化財調査報告書72集
八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―丹後谷地遺跡―』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
八戸市教育委員会 1987 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―田面木平遺跡（1）―』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
八戸市教育委員会 1990 『風張（1）遺跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集
八戸市教育委員会 2008 『風張（1）遺跡Ⅵ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第119集

（秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20）